
新しい生徒会

ヘラ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

新しい生徒会

【Nコード】

N7405V

【作者名】

ヘラ

【あらすじ】

会長、知弦さん、深夏、真冬ちゃんが碧陽学園からいなくなった後の生徒会のお話

「生徒会の金蘭」が出る前に書き始めたので設定やらなんやらが、原作のその後…」みたいな感じになってない部分もあります

挨拶

どうもヘラです。

アイデアが浮かんだので、新しく連載小説を書いていこうと思います。

まだまだ始めたばかりの初心者なので、文章がグダグダになったり、読みにくかったりするかもしれませんが、楽しんでいただけると幸いです。

物語の舞台は碧陽学園で、会長と知弦さんが卒業し、深夏と真冬ちゃんが転校した後の生徒会の話になります。

杉崎を中心に書いていこうかなあ、と思っています。

更新頻度はばらばらになると思います。家だけでなく、学校に居る時でもアイデアが浮かんだら、メモしていつて、できるだけみなさんに楽しんでいただけるように頑張りたいと思いますのでよろしく願います。

役員紹介と設定

役職

会長

杉崎 鍵 すぎさき けん

3年D組

副会長

神谷 凛 かみや りん

2年C組

小鳥遊 楓 たかなし かえで

2年C組

書記

宇宙 巡 うちゅう めぐる

3年D組

会計

小鳥遊 たかなし

桔梗 1年A組 ききょう

顧問

真儀瑠 まぎる

紗鳥 3年D組担任 さとり

設定

- ・ 副会長の小鳥遊楓と、会計の小鳥遊桔梗は姉妹である。
- ・ 優良枠は今年の生徒会はなし。
- ・ 杉崎も人気投票で決まった。
- ・ 真儀瑠先生は正式な碧陽学園の教師となり、杉崎たちの担任をやっている。
- ・ 巡は杉崎に告白して「鍵」と呼んでいる。

役員紹介と設定（後書き）

小鳥遊姉妹は椎名姉妹みたいなもんです。

始業式

「……では、生徒の皆さんはこれから頑張ってください」

俺は体育館に置かれた椅子に座りながら、無駄に長い校長先生の話
を聞いていた。

「では、生徒会顧問の真儀瑠先生、よろしくお願いします」

「いろいろあって、今年度からここの正式な教師になった。よろし
く」

真儀瑠先生、ここの正式な教師になったのか。まあ俺は学年末テス
トで水無瀬に負けたし、人気投票で上位に入ることもないだろう
から、真儀瑠先生とはもう生徒会室で会うこともないか。

「では、前生徒会副会長の杉崎、ちょっと来い」

そうか、最後にあいさつするんだったな。これで俺が全校生徒の前
でしゃべる機会は最後か…

そう思っただけで壇上に上がったら……

「杉崎、お前が次期生徒会長だ」

「は？」

何言ってるの、この人。

「大丈夫だ、前生徒会の役員に承認は得ている」

「え？」

「そういうことだ、いいな」

真儀瑠先生が俺の疑問を無視して続ける。

俺はようやく真儀瑠先生の言うことを理解して、真儀瑠先生に問いかける。

「あのー、生徒会のメンバーは、人気投票で決めるんじゃないですか？」

「本来はそういうことになってるのだがな、前生徒会の役員に、次の生徒会長を杉崎にしてくれと頼まれてな、理事長と校長と教頭の承認は得ている。あとは生徒の承認だけだ」

え、そういうことって良いの??

「というわけで、生徒諸君、次の生徒会長が杉崎でいいものは起立してくれ」

ザッ！

「全員承認か…というわけで杉崎頼んだぞ」

待ってくれ、思考が追いつかん。

「というわけで、始業式を終わります。起立、気を付け、礼」

始業式（後書き）

なんかむちゃくちゃですね W W

次はクラス割の話でも書こうと思ってます。生徒会は次の次ぐらいになると思います。

三年D組 真儀瑠先生

「はあ、何でおれが生徒会長に…」

意味分からん。

「つか何でみんな俺を生徒会長にしたかったんだ」

「良いじゃねえか、どうせ、生徒会選挙したって、前生徒会のメンバーはお前だけしかこの学校に居ないんだから」

「そうよ。それに鍵が創っていく学校つても見てみたいしね」

隣のスペース姉妹が話しかけてくる。

「僕も見てみたいなあ、杉崎君の」

「やめろっ！中目黒！！」

中目黒も話しかけてきたが、俺は中目黒の言葉をさえぎった。

「杉崎君、ひどい」

「おいおい、あまり善樹をいじめるなよ、杉崎」

「いや、俺は別にいじめたいわけじゃなくて……」

「それより、鍵、また同じクラスになれるといいわね」

巡に言われて思い出したが、なぜ俺らがこんなのに駄弁っているのかというところ…

「よし、じゃあ次のクラスを発表するぞ！」

と、担任の先生が入ってきた。そう、俺たちは今クラス分けの最中なのだ。ここで、碧陽学園のクラス分けの仕方を説明しよう。まず、始業式が終わったら、それぞれの元の教室に戻る。そこで、元担任の先生から次のクラスを聴いたら、クラス分け完了。実にシンプル。

「杉崎 D組」

俺はD組らしい。

「宇宙巡 D組」

巡もD組らしい。二年に上がるときは巡と同じクラスになるのが嫌だったが、今や巡も俺のハーレムの一員。同じクラスになれてよかったと思う。

「宇宙守 D組」

守もD組か…

「中目黒 D組」

中目黒もか……ってかやけにD組が多いな。

「…以上だ。このクラスは半分ぐらいがDクラスだ」

多っ！！

「では移動開始」

（3年D組）

ここ3年D組の教室は2年B組の真上にある。だから移動も簡単だった。もうすでにほとんどの生徒が席に座っており、担任の先生が来てないので皆それぞれ談笑している。俺も軽く周りを見渡すと…

「これはこれは。私が今最も変態だと思っているランキング3位の杉崎君じゃないですか」

「2位と1位は誰だよっ！！てかお前もD組だったのか、水無瀬」

「ええ、変態と同じクラスっていうのは嫌ですが…」

「俺だって嫌だよ！」

「私がせっかく優しくしているのに…」

「ああ、ごめん……ってなるかーっ！！」

「ばれましたか」

「そりゃばれるわっ！」

相変わらず俺の心を抉ってくる。

そこに担任の先生がやってきた。

「おい、席に着け」

「真儀瑠先生！」

やってきたのは俺を生徒会長に任命した真儀瑠先生その人だった。

「何だ杉崎」

「何で俺が生徒会長なんで」

「3年D組の担任になった真儀瑠紗鳥だ。よろしくな」

「無視かよっ！」

何でこの人無視すんのっ！？ひどすぎる。

「ということで話は終わりだ。じゃあな」

「ちょっと、真儀瑠先生！話が」

「あと杉崎は放課後生徒会室に来い！。分かったな！！」

「は、はい」

あまりの威圧感に俺は返事をしてしまった。

真儀瑠先生は言ってしまったし、俺はどうしたらいいんだ。

三年D組 真儀瑠先生（後書き）

中途半端なところで終わりますが、次はいよいよ生徒会室に入っていきたいと思います

杉崎の決意

「何でこんな目に……」

俺は一人で生徒会室に向かった。

あのあと、少し考えてから生徒会室に向かった。なぜみんなは俺に生徒会長になってほしかったのか…

疑問は残るが、あとで真儀瑠先生に訊いてみよう。

〈生徒会室〉

「遅いぞ、杉崎」

俺をここに呼び出した張本人が、そこにいた。

「真儀瑠先生、何の用ですか」

俺は真儀瑠先生に尋ねた

「ああ、お前を生徒会長にしたことについてだ」

やっぱりその事だろうと思った。俺は一番気になってることを訊いてみた。

「真儀瑠先生、なぜ会長たちが俺を生徒会長にしたかったのか。知ってることだけでもいいですから教えてください」

「ああ、そのことを話そうと思っていたところだ」

「知ってるんですか」

「ああ」

真儀瑠先生がいつもとは違い、真剣な声で言った。

「最初、桜野に頼まれてな。あいつが次の会長を杉崎にしてくれと言ってきたんだ。もちろん、私は反対した。この生徒会選挙システムを個人の都合で変えることはできない、とな。だが桜野は言う事を変えなかった。仕方ないから私は紅葉に相談した。そうしたらあいつも桜野と同意見だった。あいつらじゃ話にならんと考えて、椎名姉妹に相談した。そうしたら、あいつらも同意見でな。私はあいつらの熱意に負けて理事長に相談したら、理事長は、全校生徒が賛成なら、杉崎君に生徒会長になってもらいましょう、といった。そして、今日の始業式に至ったというわけだ。分かったか」

頭では理解できた。けど、心が追いつかない。

俺が黙っていると、真儀瑠先生が一枚の紙を見せてきた

「ほら。あいつらからのメッセージだ。読むぞ。桜野から『杉崎、私たちの都合で生徒会長押し付けちゃってごめんね。でも、杉崎が生徒会長だったら、きつと碧陽学園は良い学校になると思うから。頑張つてね』次、紅葉から『キー君、ごめんね。でも私はキー君だったらきつと碧陽学園を良い学校にしてくれると信じてるから』次、椎名姉から『鍵だったらきつと良い学校を作ってくれるって信じてるぞ。頑張つてくれ』最後に、椎名妹から『杉崎先輩、頑張つていい学校を作って下さい。杉崎先輩だったらきつと良い学校にしてくれると信じてます』」

真儀瑠先生は読み終わると、その紙を手渡してきた。

改めてその紙を見た。

「杉崎、頑張れよ」

真儀瑠先生は俺の肩を、ポン、と叩いて、生徒会室から出て行った。
そうか……おれ会長たちから期待されてるんだな。

「よっしゃーっ！俺は会長たちの期待に応えられるように、良い学校を作っていくぜーっ！！！」

そう決意して、俺は生徒会室をあとにした」

杉崎の決意（後書き）

いかがだったでしょうか。読みづらい文章だとは思いますが、楽しんでいただけたら幸いです。

次はようやく新生徒会が集まると思います

生徒会の邂逅（であい）（前書き）

作品では前の回からだいたい一カ月たってます。

作品は生徒会の初めての顔合わせです。

生徒会の邂逅（であい）

俺は今、生徒会室の前に居る。

生徒会選挙から一週間がたった。ちなみに俺は開票作業には参加していない。どんな風の吹き回しかは知らんが、真儀瑠生成がやつてくれたのだ。だから、俺は役員の名前を知らない。名前さえ知つとけば、いろいろ調査して、プレゼントとかできたのに……まあいいか。

ということ、最初の一言を何にしようか困っているところだ。

確か去年も同じことで悩んだような気がする。『好きです、付き合つて下さい！』：ダメだな。

『ちーっす。よろしくっす！』：好感度が下がるな。

どうすりゃいいんだ。

「何をしてるんだ杉崎」

ふと後ろの方から声がした。

「今、最初の一言を考えているんです」

俺は生徒会の顧問で、なおかつ、俺のクラスの担任である真儀瑠先生に告げた。

「そんなことはどうでもいいから、早く入れ」

「どうしてもよくないですよ！これで第一印象が変わるんですから」

「とりあえず早く入れ。今は誰もおらん」

あれ、本当に？

「ホントだ、誰もいない」

なんだ、考えて損した。

「というわけで、生徒会選挙の結果上位四位にランクインした奴らを、今から呼び出すから、しばらく待ってるよ」

「今から呼ぶんですか!？」

もとから呼んどけよ！

「と、いうわけで、私は購買でパン買ってくるからおとなしくしとけよ」

「あ、ちょっと…」

真儀瑠先生は俺を無視し、風のように去って行った。

まあ、少しだけならいいか。

（15分後）

コンコン、とノックの音がした。

きっと人気投票で生徒会入りした人が来たのかもしれない。

「入っても良いですよ」

俺はそう声をかけると、生徒会室のドアが、ガラガラ、と音を立てて開き、誰かが入ってきた。

「…って巡！？何でここに…」

そこにいたのは俺と同じクラスのアイドルである宇宙巡が立っていた。

「何よ、鍵。せっかく私が生徒会室に来たっていうのに」

「何でお前がここに居るんだ！？」

「え？さつき真儀瑠先生に呼び出されてね」

「え、じゃあ、新しい生徒会役員のうちの一人が巡なのか？？」

「そうよ。悪い？」

「いや、悪くないが……おまえ、アイドルの仕事どうすんだ？」

「続けながらやるわよ」

「それでいいのか？」

「ええ、だって学生は学校に居るのが仕事みたいなもんでしょ。アイドルは高校卒業してもできるけど、高校生はあと一年しかできないんだから、楽しみたいのよ。だから、マネージャーさんと話し合っつて、学校に居る時には、仕事を極力入れてもらわないようにしてもらっつわ」

……こいつはすごいな。いつだって俺の想像をはるかに超えてきやがる。

「あれ、じゃあ巡は人気投票で上位四人に入ってたってこと？」

そんなことになったら大問題だ。

「そうよ」

「巡にも投票する奴がいたんだな」

「コロすわよ」

「すみませんでしたーっ！！！」

告白されてから2カ月以上たつが、いまだに怖い時がある。

「おう、巡。早かったな」

俺と巡るがやり取りしていると、真儀瑠先生がアンパンを加えながら生徒会室に入ってきた。

「真儀瑠先生、巡が、人気投票で上位四人に入ってたって本当ですか！」

「ああ、巡は確か一位だったかな」

「一位！？」

「ああ一位だ。アイドルやってるから人気高かったんだろ」

「ほら見なさいよ鍵。これで私が美少女だってわかったでしょ」

「…確かに巡は、美少女だな…だが、とある部分がちょっと平凡だな」

「そ、そんな！私にはどこが足りないっていうの！？」

「見て分からないか？おっグフツ！！」

横からキックが跳んできた。やばい、みぞおちにはいった。

「…ああっ！大丈夫、鍵！」

正直言つてヤバイ。

「ごめんね、鍵」

心配するなら、最初からやらないでほしいもんだ。

「ああ…大丈夫だ」

俺は巡を心配させないように言う。

「よかった・・・」

いいわけあるかっ！少しは反省しろ！

そんなこんなで3人で話していると、コンコン、と、ノックする音

が聞こえた。

「どーぞ」

俺が言うつと3人の美少女達が入ってきた。

『失礼します』

この子たちが人気投票で上位四人に入っただろう。

「よし、それじゃあそろったな。最初はお互いに自己紹介でもしようか。」

俺の名前は杉崎鍵。3年D組だ。将来の夢はハーレムの主になることだ。ちなみに今はハーレムメンバー募集中だからみんなも気軽に入ってね。それじゃあ次、巡」

これで完璧なはずだ

「私の名前は宇宙巡よ。クラスは鍵と同じ3年D組。仕事はアイドルをやっているわ。それじゃあ次、そのツインテールの子」

「名前は小鳥遊楓と言います。クラスは2年C組です！得意な教科は体育と国語です。よろしくお願いします。じゃあ次、凜」

楓ちゃんか…なかなかボーイッシュな感じだ。深夏に似てるのかな。出るとこ出てるし。

「私は神谷凜と言います。クラスは楓ちゃんと同じ2年C組です。よろしくお願いします。じゃあ次、桔梗ちゃん」

あの黒髪ロングの子は凜ちゃんっていうのか…知弦さんから胸を引いたような感じが。

だが、それもまたよし！

「小鳥遊桔梗と言います。クラスは1年A組です。よろしく願います」

あれは楓ちゃんの妹かな。会長に似てとても可愛い。なでなでしたくなってきた。

「それじゃあ、役職を決めようか。じゃあ巡は何がいい？」

「私は書記をやるわ」

巡、書記、と。

「じゃあ凜ちゃんは何がいい？」

「私は、副会長がいいです」

凜ちゃん、副会長、と。

「楓ちゃんは？」

「凜と同じ副会長がいいですっ！」

楓ちゃん、副会長、と

「桔梗ちゃんは？」

「会計がやりたいです」

桔梗ちゃん、会計、と。

「じゃあ副会長が凜ちゃんと楓ちゃん、会計が桔梗ちゃん、書記が巡ってことで、真儀瑠先生じゃあこれで…ってあれ？真儀瑠先生―っ！」

「真儀瑠先生ならさっき出て行きましたよ」

マジか

「じゃあ、俺はこれ渡してくるから今日は解散ね」

そう言っただけ俺は生徒会室から走り出した。

生徒会の邂逅（であい）（後書き）

読みづらい文章だと思います。

読みやすい文章を書けるように努力していききたいと思いますので、これからもよろしくお願いします。

帰り道

「あのー、生徒会って何をするところなんですか？」

ふと凜ちゃんが俺に問いかけてきた。

今は、初めての生徒会が終わったの帰り道。俺が真儀瑠先生に用紙を提出して、生徒会室に戻ったら、凜ちゃんが一人で待っていてくれた。とてもいい子だ。

凜ちゃんは、俺と家の方角が同じらしい。

「生徒会は基本、生徒たちからの要望を受けたり、行事の運営なんかをやるんだけど、去年は会長があれだったから、基本生徒会室でしゃべるだけだったんだよ」

「じゃあ、今年も同じような方針でやるんですか？」

「うん、そうしようと思ってる。だって駄弁ってるほうが楽しいし、会長たちがそうやって築いてきた校風を変えるのはちょっと気が引けるからね」

「でも、それだったら生徒たちからの要望はどうするんですか？駄弁ってばっかだとやる時間がないんじゃない？」

確かにそうだ、去年は俺が放課後に残って雑務をこなしてきた。これを言うのはちょっと気が引けるけど、後輩に訊かれたら素直に答えないわけにはいけない。

「去年は、みんなが帰った後に俺がやってたんだよ。少しでも楽しい時間を過ごしたいから、放課後に一人でね」

「今年もそうやるんですか」

「うん」

俺がそういうと、凜ちゃんは少し考え込むように下を向いた。

「……もやります」

「え？」

「私も雑務手伝います」

ええ！？

「なんで！？」

正直言つて、美少女に雑務を手伝わせるなど、ハーレムの主として失格だ。

「だって、私もみんなと生徒会室で駄弁るできるだけ増やしたいし、なにより、杉崎先輩の力になりたいんです。だから、よりしくお願いします！」

まいったな……ここまで言われたなら断るわけにもいかない。

「雑務、大変だけど、凜ちゃんは付いてくれる？」

「はい、がんばります！」

「よし、じゃあ、一緒に頑張ろう!」

「はい!」

その後は他愛もない話をしながら二人で歩いていた

「それじゃあ、失礼します」

そう言っつて凜ちゃんは俺に頭を下げた。

……あれここは……

「凜ちゃんの家ってここなの?」

「はい」

マジか……

「俺、隣のマンションに住んでるんだけど…」

そう、ここの隣はマンションで、そこに俺は住んでいる。

「本当ですか!?!じゃあこれから毎日一緒に帰れますね!」

凜ちゃんは嬉々とした声で言った。

初対面の女子に、ここまで好かれたのは林檎以来だな。

「それじゃあ、さようなら!」

「じゃあまた明日生徒会室でね」

「はい！」

そう言つて凜ちゃんは、ポニーテールをふぁさふぁ揺らしながら家の中へはいつて行つた。

物静かな感じだったけど、けっこうしゃべるんだな…

そして俺は自分の住んでいるマンションに入つて行つた。

帰り道（後書き）

いかがだったでしょうか？

凛は自分的にツンデレっていう設定だったんですが、書いてるうちに変わりましたww

駄弁る生徒会（前書き）

いよいよ本格的な生徒会っていう感じになってきましたw

駄弁る生徒会

「それじゃあ親睦を深めるために駄弁ろつか」

「いえーい!!」

巡が盛り上げてくれる。

「杉崎先輩は去年優良枠で生徒会に入っただんすよね。どうして生徒会に入ろうとしたんですか？」

凜ちゃんが俺に訊いてきた。

「あれは、ただ前の生徒会の人たちのようになりたいと思ったんだ。だから頑張って勉強して、学年で一位になったんだ」

「あの時の鍵は、生徒会に入るためにすごい努力してたもんね」

「会長の次に点数が良かった人は何点だったんですか？」

次は楓ちゃんに訊かれた。

「いや、あの時は同着の一位だったんだ。俺とそいつは仲が悪かったから絶対に追いついてやろうと思ったよ。その時は俺もそいつも満点だった」

「全部ですか!？」

「ああ」

『すっつー!!』

「だけどこの頃は二位が続いてね、次はどうやったらあいつに勝てるんだろうと思ってる」

「会長、満点を取ったことがあるなんてすごいですね！ぼく先輩の努力に感動しました！」

アレ？今何か変な言葉が聞こえたような……

「楓ちゃん…今、自分のこと、何て言った？」

「え…ぼくですけど…」

な、なんてことだ!!

「楓！それ本気で言ってるの!？」

「はい」

巡が訊いたが、どうやら本気らしい。

「お姉ちゃんは小学校のころからこの口調で通ってきてるんです」

「マジか……」

これは………イイ！

ぼくっ娘が現実に存在するっていうのも初めて見た。あれは、二次元限定じゃないんだ！

しかも、ぼくっ娘でしかも胸がデカい！これはイイ！！

「それと会長、ぼくのはちゃん付けで呼ばずに、『楓』って呼んでください」

しかも、いきなり名前呼び捨て！好感度アップ！！

「鍵、鼻の下が伸びてるわよ」

はっ！いけないいけない。

「ところで、楓と凜はいつごろから友達なの？」

「それは気になる」

「たしか、中二のころに、同じクラスになって、そこから仲良くなっただと思います」

「あの頃の凜はすごかったんですよ」

何がどうすごかったのか気になる。でも、訊いたらちよつとヤバくなるフラグだと思う。

「どんなふうによかったの？」

巡、やめてーっ！それ以上聞くと大変なことになりそうだから！

「えーっと、説明するのは難しいんで、実践でやりますね」

「楓ちゃん、あれやるの？」

「だって、凜もそのほうが嬉しいでしょ。じゃあ、桔梗、奥で着替えてきて」

「わかった」

いったい何が始まるって言うんだ!?

~~~~~10分後~~~~~

「お姉ちゃん、着替え終わったよ」

「じゃあこっちに来て」

ガラガラと音がして、奥の扉が開く。そして桔梗ちゃんが入ってきた。

「ってあれ?どこも変わってないように見えるんだけど」

「本当ね」

「いやいや変わってますよ。ほら、足元を見てください」

よく見る、かかとの高いヒールをはいていた。

おいおい、何をする気だ!?

「それじゃあ凜、準備はいい?」

「は……はい」

ちょっと待て！今、凜ちゃんの口調が明らかにおかしかっただろ！！  
俺は巡とアイコンタクトを交わし止めに入った。

「ストップ！」

「やめなさい！」

「えゝ、なんで止めるんですか、会長」

「いやいや！これは止めないといけないだろ！」

「そつよ！明らかにSMじゃない！」

「そうですよ。凜は昔からずっとドMなんです。そして桔梗は凜を  
いじって楽しかったのか、ドSの方向に目覚めちゃって・・・」

「そんなことより今は止めよう！」

「桔梗を凜に会わせたのが駄目だったんでしょうかねえ」

「そんなこと言う前に早く助けようよ！」

そんなこんなで、この騒動が治まるのに20分ぐらいかった。

「はあ、はあ。なんかとても疲れたわね」

「俺も同意見だ」

俺と巡が肩で息をしているなか、桔梗ちゃんは奥の物置にあった鞭  
をいじってた。

完全にドSに目覚めちゃってるな。身長は会長ぐらいで、けっこう可愛かったのにな…

この子たちが俺のハーレムに入ると、エライことが起きそうだ。

キンコンカンコンコン

とそこでチャイムが鳴った。

「チャイムが鳴ったな。それじゃあ今日の生徒会はここまで。じゃあねみんな」

「じゃあね、鍵」

『失礼します』

「先輩、今日の雑務はどうするんですか？」

「今日は別になかったから、帰ろっか」

「はい！」

碧陽学園生徒会、そこには今年も個性的なメンバーが会話を繰り広げていた。

## 駄弁る生徒会（後書き）

終わり方が無理やりのような気がしますww

次は原作のようにラジオ放送の話でも書こうかなあ、と思っています

## 放送する生徒会（前書き）

原作にあったのを自分なりにいろいろと変化を付けて書いてみました。

楽しんでもらえると幸いです

## 放送する生徒会

「なあ、杉崎、またあれやってくれないか」

昼休み、俺は同じクラスの放送部のやつから話しかけられた。

「あれって何のことだ？」

「ほら、あの前の生徒会でやってた…」

いやな予感がする。まさか……

「ラジオ放送のことか！？」

「それぞれ！去年のあのラジオが結構人気でさ、今年もやってくれるって…」

「絶対に嫌だ！あれには嫌な思い出がたくさんある！」

「頼むって」

「絶対いやだ！！」

「しょうがない……じゃあほかの人に掛け合ってこよう」

「やめてくれー！！」

俺の制止も聞かず、そいつは去って行った。  
だ、大丈夫だよな……ほかの役員ならおれの気持ちを理解してくれる。

はずだ…

〈放課後〉

「よ！ちゃんと許可をもらったぜ！」

俺が生徒会室に行くと、放送部員たちが機材をセッティングしていた。誰が許可したんだ！

「ちなみに、誰から許可をもらったんだ」

「一年生の会計の子だ」

桔梗ちゃんか。あのDS会計、俺をいじめて何が楽しいんだ！美少女だから許すが。

「それと、去年人気だったコーナーは残しといてくれ」

「何が人気だったんだ？」

「『決められた一言』ってコーナーと『ころけん』だったかな」

「なんで『ころけん』のコーナーが人気だったんだよ！」

「それじゃあよろしくな！」

「無視すんなっ！」

機材のセッティングを終えると、そいつは足早に去って行った。だが、『決められた一言』があるのはうれしい。なんせ、あのDS



「笑ってんじゃねえよ！」

桔梗「スギサキ」クロス 承認

「すんませんでしたーっ！」

桔梗「……分かりました、そこまで言うなら……」

「ありがとうございます！」

桔梗「私がやってあげます」

「いやー！！！！！！！！！！！！！！」

「じゃあ次のコーナー行くわよ！」

2年「このタイミングで!？」

「次は新コーナー『ナウメロ』です」

「『ナウメロ』って何ですか？」

巡「『ナウメロ』っていうのは、いまどきの流行の音楽をかけるコーナーよ」

「確か去年は『懐メロ』だったよな」

「そうよ、だから『ナウメロ』ってわけ。それじゃあ一曲目」

「何だ今の歌？」

「聞いたことない歌ですね」

「そりやそうよ。だって昨日収録した歌だもん」

「ナウい！」

「だって『ナウメロ』だもん」

「でもそれっていいんですか？」

巡 「マナージャーに言つて借りたのよ。じゃあ次の曲」  
「ベチンッ、ベチンッ」

「もはや曲ですらない！」

「これは……」

「楓ちゃん、何か知ってるの」

楓 「ぼくが桔梗から鞭を借りて、床をたたいた時の音だ。しかも」とい

「なんでそんなことしてるのっ!？」

楓 「いやー、桔梗があまりにも面白そうに鞭を使うんで、つい」  
鍵 「ついじゃねーよ！」  
巡 「それじゃあ次のコーナー」  
鍵 「巡も少しは空気読めよ！」  
凜 「鞭を持った楓ちゃん……ステキ」  
鍵 「凜ちゃんも何言ってるの!？」  
巡 「じゃあ、小鳥遊姉妹はヘッドホンをしといてね」  
ヘッドホン装着  
巡 「『決められた一言』のコーナー」  
鍵 「嫌な思い出がよみがえってくる……」  
巡 「鍵のセリフが『断る!』で、凜のセリフが『じゃあ、それで』  
ってことで」  
鍵 「難易度半端ねえ！」  
巡 「それじゃあ、いくわよ！」  
楓 「いいんですか」  
桔梗 「普通にしゃべればいいんだよね、お姉ちゃん」  
楓 「そうみたい」  
凜 「じゃあ、それで」  
楓 「そうだね。じゃあ会長はなにか趣味とかあるんですか」  
鍵 「断る！」  
楓 「ええ！そんなに過激な趣味を……」  
鍵 「断る！」  
楓 「やっぱりそうなんですネ」  
桔梗 「お姉ちゃん、杉崎先輩だって男の子なんだから、そういう趣味の一つや二つ持ってると思うよ」  
凜 「じゃあ、それで」  
楓 「な、なな、なんで凜が答えるの?!」  
鍵 「断る！」  
桔梗 「お姉ちゃん、もうこの二人ダメみたいだよ」  
凜 「じゃあ、それで」

桔梗「なんで凜ちゃんが答えるの!？」

鍵「断る!」

桔梗「先輩も邪魔しないでください!」

鍵「断る!」

桔梗「邪魔するとうなるかわかりますか」

凜「じゃあ、それで」

桔梗「ええっ!」

楓「会長がそんな過激な趣味を…」

桔梗「お姉ちゃん!? 顔が真っ赤だよ!」

凜「じゃあ、それで」

桔梗「凜ちゃんは黙ってて!」

鍵「断る!」

桔梗「凜ちゃん、邪魔するとうなるかわかってる」

凜「じゃあ、それで」

桔梗「!?!?」

楓「ああ、会長が…そんな…」

巡「うんうん。イイ感じに壊れてくれたわね。それじゃあ、鍵、

凜、もういいわよ」

鍵「ふう、疲れたけど楽しかったな」

凜「そうですね、疲れました」

巡「それではお便りのコーナー」

鍵「また展開が急になったな」

巡「『桔梗ちゃん…いじめてください…私…もう…ダメ』」

鍵「何があつたんだよ!」

凜「ダメです!桔梗ちゃんは渡しません!」

鍵「いやいや、凜ちゃんも何言ってるの!?!」

巡「それじゃあ次のお便り」

鍵「お前は少し間を取れ!」

巡「『生徒会って何するところなんですか?』」

鍵「まじめなお便りキターッ!!!」

巡 「生徒会は駄弁るところよ！」

鍵 「いやいや！本当は仕事するところだからな！」

巡 「というわけで。小鳥遊姉妹が復活しないので、今日はここま  
で。それではまた今度お会いしましょう。EDテーマ『TYUN  
i b y o u 』うちの弟の暗い過去』です」

鍵 「守に何があつたんだ」

♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪

## 放送する生徒会（後書き）

いつもより多めに書いたような気がします。  
っていかいつもが少ないと思います。  
どうやったらかけるんでしょうか？

## トランプタワー（前書き）

最後の方、ちょっと重い話だと思いますが、気軽に読んで下さいw

## トランプタワー

『……』

俺がとある用事で、少し遅れて生徒会室に行くと、凜ちゃんと楓がトランプで何かしていた。

「何してるの？」

『あー！！！』

俺が声をかけると、2人は短い、悲鳴じみた声を出した。  
あれ、俺、何か悪いことをした？

「会長！どうしてくれるんですか！」

「へ？俺が何かした？」

「しました！」

「先輩！今、私たちトランプタワーを作ろうとしてたんですよ！先輩が声をかけたせいで集中力が途切れちゃったじゃないですか！」

「え？俺が悪いの？」

『もちろんです！！！！』

そこまでひどいことをしたのか…ちゃんと謝らないとだめだな。

「ごめん。俺が悪かったよ」

「……分かりました…先輩がそこまで言うなら許しましょう」

凜ちゃんは俺を許してくれた。やっぱり素直に謝るのが一番…

「会長なんてもう嫌いです！」

「楓ちゃん！？」

「すみませんでした！！俺に出来ることは何でもしますから、嫌になるのだけは勘弁してください！！！！」

「先輩！？」

「嫌です！！会長なんて、どうにでもなればいいんです！！！！」

「本当にすみませんでした！！！！このとおりなんでもしますから！！！！見捨てないください！！！！」

「……しょうがないですね…今回だけは許してあげます」

「ありがとうございます！！」

やっぱり素直に謝るのが一番だ。

「じゃあ、一緒にやりましょう」

「ところで、桔梗ちゃんは？」

「桔梗なら、今日は用事があるとかで帰りましたよ」

「じゃあ、今日の生徒会は3人だね」

「あれ、巡先輩はどうしたんですか？」

「巡は、今日、どうしても行かなきゃならない仕事があるから生徒会に来れないんだよ」

「じゃあ、早くやりましょう！」

「そうだね、じゃあ早速、2人とも脱いでもらえるかな」

「ぬ、ぬぬ、脱ぐー！」

「なんでそうなるんですかっ！」

楓の顔が真っ赤っかになっていた。意外とこういう話に弱いのかな。

「なんでって、そりゃ今からこの机をベッドに見立てて……」

俺がそこまで言うと、隣から凜ちゃんが俺の口を押さえた。

「…先輩、それ以上言うとは大変なことになりますよ」

凜ちゃんは、俺の耳元で囁くと、楓ちゃんに声をかけた。

「楓ちゃん、そんなことより早くトランプタワーを作る」

「う…うん」

……これからは自粛しよう。あれ？

「そっといえば、凜ちゃん」

「何ですか？」

「さっき、『大変なことになる』って言ったけど、どうなるの？」

「……昔、私と楓ちゃんと桔梗ちゃんて遊んだ時があっただけです。そのとき、桔梗ちゃんが、『お姉ちゃんはおとも弱いところがあるんです』って言ったんです。そのあと、桔梗ちゃんが楓ちゃんに耳打ちして、そしたら楓ちゃんの顔が真っ赤になって、桔梗ちゃんが笑ってたんです。私はそれだけで楓ちゃんの弱点がわかったんですが、桔梗ちゃんはたまにそういうことをするようなんです。そのときは、いつもより多めにやったそうなんです。そしたら……」

何があっただけ……

「楓ちゃんが桔梗ちゃんを殴ったんです。それも人間のパンチとは思えないような速さでした。結局、桔梗ちゃんは気絶して家まで私が背負って行ったんですが、楓ちゃんは自分が何をやったのか覚えてなくて……」

「それで桔梗ちゃんはどうなったの？」

「桔梗ちゃんは、次の日、学校を休みました。楓ちゃんになんで休みなのか訊いたら、『何度起こしても、桔梗が起きない』って言うてました。先輩も下手したら同じ運命になりますよ」

マジッすか…

命は大事にしなきゃいけないから、自粛しよう。っていつか間違っ  
て口走らないようにしよう。

「会長、早く作りましょう！」

良かった…ちゃんと忘れていたようだ。

それじゃあ、トランプタワー作りを手伝いますか。

~~~~~

「……あと2段だよ、楓ちゃん」

「……そうだね、凜」

「……集中力を切らさないように」

俺らは、何度か失敗しながらも、あと2段のところまでトランプタ
ワーを作った。つまり、使うトランプは、あと7枚。ここまでくれ
ば、完成も間近だ。

『ガラッ！！』

『ファサッ！！』

…あ…これ…？

「ちゃんと仕事してるかー」

目の前には、無残にも崩れ去ったトランプタワーがあった。

「ん？何をしてたんだ？」

声の主は生徒会の顧問であり、俺のクラスの担任である真儀瑠先生だった。

「…なんだ、お前ら、トランプで遊んでたのか。私も混ぜてくれ」

俺らはアイコンタクトで、素早く意思疎通を図ると、真儀瑠先生を怒鳴りつけた。

『真儀瑠先生！そこに正座してください！』

「ハイっ！」

真儀瑠先生はいつものような堂々とした声ではなく、驚いたような裏返った声を出した。おそらく自分がしたことはわかってないと思う。ここはしっかり説教しなければ…

「いいですか先生、人間は悪いことをしたら謝らなければならぬんです」

「私、何か悪いことしたか」

「はい、しました」

「いや、私はそんなことした覚えはないぞ」

「とりあえず謝ってください」

「…とりあえず、私が何をしたのか教えてくれ、凜」

「先生は私たちが時間をかけて、一生懸命作ったトランプタワーを、後ろから話しかけ、集中力を乱し、トランプタワーを崩す。という大変大きい罪を犯しました」

「それだけ!？」

「それだけとはなんですか!ぼくたちは頑張ったんですよ!先生は処罰されなければならぬですよ!」

「いやいや、頑張ったんなら集中力を乱すなよ」

「ああいえば、こういう」

「それはお前らのことじゃないか」

「とりあえず、先生も手伝ってください」

「私は…」

「先生、あの事を公にしてもいいんですか？」

「それだけはやめてくれ!杉崎」

「じゃあ手伝ってください」

「…はい」

やっぱり交渉術っていうのは大切だな。

「じゃあ、やりましょう!」

~~~~~

「……あと一段か…」

「そうですね…」

あと一段。俺らは頑張ってトランプタワーを作り上げた。時計を見ると、すでに絶対下校を過ぎており、8時になっていた。だが、そんなことは関係ない。これを完成させなければ帰れない。

「じゃあ、最後は楓ちゃんがやってね」

「分かったよ」

全員が息をのむ。真儀瑠先生も、最初はあまり乗り気ではなかったが、後々真剣になってきた。

『サッ』

『!?!?!?!?!』

あぶねえ!!!!全部崩れなくてよかった!  
あと少し振動が大きかったら、完全に崩れていた。

「…そーっと、そーっと…」

よし、修正できた。

「…それじゃあ、最後乗せます…」

ゴクリ、再び全員が息をのむ。

そして……

最後の一段が……

乗った……

『おーっ！……！！！！』

歓声が沸き起こった。

やった！俺らはついに作り上げたんだ！！

「やったね！楓ちゃん！」

「ありがとう！凜！」

素晴らしい友情を目の前で見たような気がした。

~~~~~

トランプタワーを作り終えて、凜ちゃんと楓は真儀瑠先生が車で送って行った。俺は今日はまだやっていない雑務をこなしていた。

しばらくして…

「…杉崎、まだ残っていたのか」

真儀瑠先生が凜ちゃんたちを送って帰ってきたようだ。

「はい、まだ今日の雑務が終わってなかったですから」

「そうか…。じゃあ私が手伝ってやろう」

「え？」

「雑務を早く終わらせるために手伝ってやるよ」

「どういう風の吹きまわしですか」

「早く終わらせないと、さすがに時間がな…」

時計を見ると、すでに10時を回っていた。さすがに遅いな…。ここは真儀瑠先生の好意に甘えよう。

「ありがとうございます。じゃあ、とっとと片づけちゃいましょう」

「ああ」

「…やっと終わった」

時計を見ると11時前だった。遅くなってしまったな。

「杉崎、よかったら送ってくぞ」

「……いや、いいです」

「いや、送っていく。お前に決定権はない。ちょうど話したいこともあったからな」

「じゃあ最初から訊かないで下さいよ」

生徒会室を出た後。鍵を職員室に置きにいつてから、真儀瑠先生の車に乗り込んだ。

「…で、話って何ですか」

「実はな、凜のことなんだが…」

「凜ちゃんがどうかしたんですか？」

「凜はな、今一人暮らしをしてるんだ」

一人暮らしか…。女の子にとっては大変なことかもしれないけど…

「大丈夫ですよ。一人暮らしは大変ですけど、いざというときには俺が力になりますから」

「いや、そういうことじゃないんだ。」

「え？」

「凜の両親はな、5年前、凜が中学生に上がったばかりのときに、凜の親がいなくなってたな」

「は？」

親が、いなくなった？

「凜はその時だいぶショックを受けてな、今でこそおとなしいし、
明るいから大丈夫なんだが、当時は精神状態が不安定でな、時々狂
ったように暴れだしていた」

「…そんなことが……」

「私は、凜の母親と古くからの友人でな、その時も一年間に何度か
会っていて、居なくなった日の前日にも一緒に飲みに行ってたんだ。
その日の遅くに、私の携帯に一件のメールが入ってた。『凜のこと、
よろしく頼むね』っていう内容でな。私はだいぶ酔っ払ってて悪ふ
ざけのメールだと思ってた。だが、次の日、警察が私のうちに来て、
『この方たちが、今、どこにいるかご存知ですか』と訊いてきた。
手に持っていた写真を見ると、凜の両親の写真だった。私はかなり
ショックを受けた。前日に送られてきたメールを見直すと、最後に
こういうことが書いてあった。『勝手なことだけど、許してね』つ
てな。私は急いで凜の母親の携帯に電話したが、凜の家でその携帯
が見つかったんだ。それから凜の親は行方不明になって、私が凜の
母親代わりになった」

「…そんなことが」

「凜はその後私の家に住むようになったが、高校に入ってから凜は
一人暮らしをしたいって言い出してな。私は反対したが、凜は言う
ことを聞かなかった。最後には私も折れてな、凜の一人暮らしを許
可したんだ。それで今に至るということだ」

……

俺は何も答えることができなかった。

~~~~~

そうこうしている間に俺と真儀瑠先生が乗った車は俺の住むマンションの前に着いていた。

「すまん、杉崎」

「いえ。送ってもらってありがとうございます」

「礼をするのは私のほうだ。お前に話を聞いてもらって、なんか気分が晴れたよ。私もずっと悲しかったからな」

「そうですか……」

「それじゃあな。私は凜の家にとっと寄って行くから、お前ももう帰れ」

「はい」

「じゃあ、また明日学校でな」

「真儀瑠先生！」

俺は真儀瑠先生を引きとめた。

「凜ちゃんの過去に何があるって、凜ちゃんは俺のハーレムメンバ

「です。だから何があるかと凜ちゃんを見捨てたり、嫌いになったりしないので、安心してください!」

「……そうだったな。お前だったら、安心して任せられる」

「ありがとうございます。今ならもれなく真儀瑠先生も俺のハーレムメンバーに加えてあげますよ」

「……そうだな……考えておく」

「ぜひ入ってくださいね」

「気が向いたらな」

「それじゃあ、さよなら」

「じゃあな」

最後はいつものような冗談のやり取りをして別れた。

過去に辛いことがあったなら、現在や未来にいいことをしてあげる。そうじゃないとつらいままだからな。だから、この生徒会でいられる時間をできるだけ増やそう。できるだけ楽しくしよう。そして、……絶対に悲しくて泣くことのない生徒会を作る努力をしよう。

「凜の家」

「あ、真儀瑠先生。ご飯作っただけですけど、食べますか?」

「ああ、いただきます」

「今日は時間がなかったんで卵焼きを作ったんですよ」

「いつものことだが、美味そうだな」

「ありがとうございます！」

「家庭科以外の教科もこれぐらい上達してほしいものだな。再来週はテストだしな」

「う！」

「せめて、赤点だけは取るなよ」

「…頑張ります……」

「それじゃあな」

「え？もう帰るんですか？」

「ああ、今日中にやらなきゃならないこともあるしな」

「そうですか…頑張ってくださいね」

「お前もな」

「はい！」

「それじゃあな」

「さよなら!」

## トランプタワー（後書き）

最後の方の終わらせ方が、雑なような気がしますw

今回は夏休みに更新できる最後の話だと思います。更新スピードをなるべく早くできるように頑張ります。

## テスト後の生徒会（前書き）

珍回答を作るのが難しかったです。

## テスト後の生徒会

……えーっと…これは、どういふことなのだろうか……

俺が生徒会室に入ると、凜ちゃんと桔梗ちゃんが、生徒会室の端っこのほうで、負のオーラを振りまいていた。

生徒会室を見回すと、先に来ていた楓と目があった。

「ちょっと、あの二人に何があったのよ」

俺と一緒に来ていた巡が、二人に聞こえないように小声で訊いた。

「これです…」

そう言つて楓が見せてきたのは、先週行われた期末テストだった。

……つまり、結果が悪くて、落ち込んでいたということか。

俺は二人に席に着くよう促した。

「…それで、どのくらい悪かったの？」

『うぐっ！！』

そこまで悪かったのか…。でも、会長よりはましだろう。会長のは次元が違うからな。

ここで一つ言っておくが、俺の中での会長は、桜野くりむただ一人なのだ。これは誰が何を言おうと、変わらない。たとえ俺がハーレ

ムの主になつたとしても、会長は会長なのだ。

……あれ？でも、主よりも位が上な人がいるハーレムってありなのか？……いや、でも会長は会長だし……。でもやっぱり……

「ちょっと、鍵！大丈夫！？」

「はっ！！」

危ない危ない。あやうく本題を忘れるところだった。

「じゃあ、みんなで見せあいっこしようか」

『……………』

二人が物凄い睨んできた。コワイ。

「二人とも大丈夫だって。ね、会長」

楓がウインクしてきた。…ここは楓の力を借りるか…

「そうそう。絶対に笑ったりしないから」

『……………』

二人でアイコンタクトを交わしてる。さて、どっちだ…

『分かりました』

おおーっ！ナイス楓！

「じゃあ、まず俺から行くよ」

ちなみに、中間テストなので、教科は英・数・国・理・社の5教科だ。

|    |      |
|----|------|
| 英語 | 100点 |
| 数学 | 100点 |
| 国語 | 97点  |
| 理科 | 100点 |
| 社会 | 99点  |
| 合計 | 496点 |

「相変わらずすごいわね…」

「すごいですね！会長！！」

『ずーん！』

ほめられるのはうれしいが、二人にプレッシャーを与えてしまったようだ。

ここはどうしたらいいんだ…

「二人とも見せるって約束したでしょ、だからちゃんと見せなきゃだめだよ」

ナイス楓！！

今日は楓に助けられてばかりだな…

「じゃあ、次は私ね」

巡の番だ

|    |   |   |    |
|----|---|---|----|
| 英語 | 8 | 8 | 点  |
| 数学 | 9 | 3 | 点  |
| 国語 | 8 | 4 | 点  |
| 理科 | 9 | 4 | 点  |
| 社会 | 9 | 6 | 点  |
| 合計 | 4 | 5 | 5点 |

「うわぁ！すごいですね！！」

「それほどでもないわよ」

『ずーん！！』

………なんだろう、二人の落ち込み具合がさっきよりすごい気がする。

「それじゃあ、つぎはぼくの番ですね」

楓の番だ

|    |   |   |    |
|----|---|---|----|
| 英語 | 7 | 3 | 点  |
| 数学 | 8 | 3 | 点  |
| 国語 | 1 | 0 | 0点 |
| 理科 | 6 | 8 | 点  |
| 社会 | 7 | 9 | 点  |
| 合計 | 4 | 0 | 3点 |

「国語だけすげえ！！」

「いや、それほどでも……」

『ずーん!!!!』

二人のテンションがヤバいことになっている。

「次、私ですか……」

「そうだね、二人の落ち込み具合からして、凜ちゃんのほうが悪いと思うから、先に桔梗ちゃんからで」

「……はい」

さて、どんな点数が待ってるんだ……

|      |     |   |
|------|-----|---|
| 英語   | 37  | 点 |
| 数学   | 40  | 点 |
| 国語   | 22  | 点 |
| (赤点) |     |   |
| 理科   | 30  | 点 |
| 社会   | 33  | 点 |
| 合計   | 185 | 点 |

『……………』

生徒会がお通夜みたいなテンションになってる。どうする……

「……じゃあ、凜の番で」

ナイス楓！誰も話さない状況でよくいった!!

っていうか、正直言って怖い。

だってこれよりも悪くなったら生徒会の空気がヤバイ。

しかもこれより悪いってことは、会長より悪い。これはヤバイ。でもここまで来たからには逃げられない。毒食らわば皿までだ。

|        |    |   |
|--------|----|---|
| 英語     | 12 | 点 |
| 数学     | 6  | 点 |
| 国語     | 11 | 点 |
| 理科     | 19 | 点 |
| 社会     | 8  | 点 |
| 合計     | 66 | 点 |
| (全部赤点) |    |   |
| (追試確定) |    |   |

.....

…これは……ダメだね……こんな点数取ったら……そりゃへこむよね……

しかも誰もしゃべらない。なんのリアクションもなく、ただ生徒会室の空気だけが重くなっていく。聞こえるのは、外で練習している運動部の掛け声だけ。まさに静寂。

…こんなときに、真儀瑠先生がいたらなあ…

ガラッ！

「伏せるッ！！！」

おおっ！噂をすれば真儀瑠先生じゃないか！

「…何だお前ら、なぜ反応しない。……ん？これは…」

真儀瑠先生が凜ちゃん的答案用紙を見る。よし、作戦通り！

「…凜、赤点だけはあれだけ取るなといっただろう」

「……すみません…」

「それと、桔梗。私の教える国語で赤点を取るとはいい度胸だな」

「う！」

「お前ら二人は今回のことを反省しろ。今から私たちで答案を確認する。ふざけた答えがあったら…どうなるか、わかってるだろうな」

『ひっ！』

真儀瑠先生が低い声で言う。

……威圧感がハンパねえ…

「お前らも手伝え」

…え？俺らも手伝わされるの？マジかよ……

『分かりました！』

…ってなんで巡も楓も乗り気なんだよっ！凜ちゃんと桔梗ちゃんが泣いてるよ！！生徒会室で明るい空気と暗い空気がまじりあってるよ！…！

「俺はどうすればいいんだ…」

「何言ってんだ杉崎、お前も手伝え」

マジかよ……

「お前らが『この答えはふざけてる』と思ったやつは全部ピックアップしろ。ノルマは一人十個だ」

「先生、なんだかんだで楽しんでませんか」

「何を言う杉崎」

そうだよな。教師が生徒をいじめるのを楽しんだら問題だよな…

「ここで楽しまずして、いつ楽しめというんだ」

っておい！いろいろ問題だろ！

「とりあえず、口より手を動かせ」

『はい』

なんでこの二人はこんなに乗り気なんだ…

（30分後）

……これはひどい。何て言うか……とてもひどい。会長よりひどい答えがたくさんあった。そのなかで俺が『この子たち頭おかしいんじゃないの』と思った問題とその答えをここに記そう。

く 桔梗ちゃんの国語く

問、以下の漢字の読み方を答えよ。

『豪華』

答、なんかとてもすごい感じのやつ

俺の感想、この子頭大丈夫なの！？

く 凜ちゃんの国語く

問、次の文章を読んで以下の問に答えよ。

『つれづれなるままに、日暮し、硯に向かひて、心につつりゆくよしなしごとを、そこはかとなく書きつくれば、くるしうこそものぐるほしけれ』

問1、この作品の名称を答えよ。

答、日記

俺の感想、誰のだよ！

問2、この作品を書いた人物の名前を答えよ。

答、真儀瑠先生

俺の感想、そういうことを聞いているんじゃないよ！

凜ちゃんの社会

問、中華人民共和国を建国したのは誰か答えよ。

答、人間

俺の感想、人間以外の生物で国を作れるのはいねえよ！

同じく社会

問、物価が急に上昇することをなんというでしょう。

答、ギョーイン！

俺の感想、効果音を解答欄に書くやつは初めて見たよ！

．．．

「お前ら、反省したか？」

『はい…』

「よしわかった、なら二人ともうちに来い。徹夜で説教してやる」

『…はい』

「先生、なんで反省の後に説教なんですか？」

楓が真儀瑠先生に尋ねると…

「そっちのほうがおもしろいだろ」

「おいおい！あんた本当に教師としてこの場にいていいのか！？」

この人は人間がまっただくなってる。そもそも、教師が生徒を家に連れ込むというのは…

「まあいいじゃない、鍵。真儀瑠先生に説教されれば凜も桔梗も成績が伸びるんじゃない」

「確かに…」

…よくよく考えると、そっちのほうがいいのかもしれないな。

「というわけで、決まりだな。じゃあ楓、桔梗を今晚預かるぞ」

「はい、いくらでもお預けします」

「お前らも早く帰れよ！じゃあな」

『助けてーっ！！』

真儀瑠先生が二人を抱えて出て行った。こういう失敗を繰り返して人は成長するものだと思っ。

「よし、近くのコンビニで酒買ってくるか！」

…前言撤回。あの人、ただ単に一人なのがさみしいだけだ。もともと打たれ弱いのに、一人暮らしだからなあ……。まあ、二人が明日

酔っ払いながら、生徒会室に來ないことを祈ろう。

＜翌日、二人は生徒会室に着くなり、すぐにぶっ倒れましたとき。  
めでたし、めでたし＞（↑全然めでたくないけど、真儀瑠先生にそ  
うしとけと言われたのでそうします）

## テスト後の生徒会（後書き）

今回は凜と桔梗がテストでとても悪い点数を取ったという話なんです。が、支所に思っていた凜のイメージとだいぶかけ離れたような気がしてきましたw。

珍回答を作るときは、社会の問題が簡単でした。

バカテスの作者さんってすごいなあと改めて思いましたw

### 3年D組の戦いゝ其の一ゝ

人は本当に強い敵とぶつかったときに、本来の力を発揮して敵を倒す。そういう話を聞いたことはないだろうか。しかし、強すぎる敵はそんなもんじゃ倒れてくれない。

誰かこの敵に勝てるやつはいないのだろうか。

誰か、この人を倒してくれ……。

人間という枠を超えたこの人を……倒してくれ……

俺はもう倒せない……だけど、せめてこの人が倒れるところだけは見せてほしい。

誰でもいい……誰でもいいから、早くあの人を……倒してくれ……。

### 3年D組の戦いゝ其の一ゝ（後書き）

今回はちよつと壮大に書きすぎたかもしれませんが、次回ではいつもの感じに戻ります

### 3年D組の戦いゝ其の二ゝ

「杉崎君、次、体育の時間だよ」

授業の終わりのチャイムが鳴り終わった後、俺の後ろの席の中目黒がそう言ってきた。

「ああ、そうだったな。着替えに行くか」

ゝ更衣中ゝ

「今日の体育何やるんだろうね」

「どうせ、バスケとかバレーとかじゃないか」

「ぼくは球技得意じゃないけど、杉崎君と同じチームならうれしいなあ」

「やめてくれ！中目黒」

「まあいいじゃねえか、杉崎。球技はみんなで楽しくやったほうがいいだろ」

「まあ、そうだけど…」

俺、中目黒、守の三人はいつも通りだらだらしゃべりながら、体育館に向かっていった。

「おい！お前ら遅いぞ！」

『・・・』

えーっと…なんで真儀瑠先生がここに？

「真儀瑠先生、なんでここにいますか？」

あ！俺が訊こうと思ってたのに。  
守、うぜえ

「今日は私が体育の授業をやることになった」

ああ、そういうことか…

「ああ、そういうことですね」

あ！またセリフ取られた！  
守、ガチでうぜえ。

「今日は男女混同でやるぞ」

おお！それじゃあ、接触もありか！

「先生！接触はありますか！」

「おい守！さっきから俺のセリフの邪魔ばかりしてないか！？なあ！」

「何を言ってるんだ杉崎。俺は思ったことを素直に口にただけだ」

「うそつけ！マインドリーディングでも使ってるんだろ！」

「使っわけねえだろ」

クソッ！これじゃあまるで俺が悪いみたじゃないか。

「それじゃあ始めるぞ」

俺と守がしゃべってる間に、いつの間にかクラス全員がそろっていった。

真儀瑠先生は、俺らを無視して授業の説明を始めていた。あわてて二人で耳を傾ける。

「ルールは簡単だ。お前らには、この水鉄砲を使って私を倒しに来てもらう。ただ個人だけだと面白くないので、団体戦で行こうと思う。一チーム五人、計8チームと私だ。ほかのチームと協力するのもありだし、他のチームを倒すのもありだ。チームのメンバー全員が濡れた時点で、そのチームは失格だ。チーム分けはここに書いてある。ちなみに、私を濡らしたチームには褒美をやる。範囲は碧陽学園全体だ。それじゃあ、初め！」

真儀瑠先生はそう言うが否や、さっさと体育館を出て行った。

まあ、まずはチーム分けを確認しよう。

えーっと、俺のチームは……Aチームか。

メンバーは……俺、守、中目黒、巡、水無瀬か。  
なんかいつも通りだな。

「何だよいつもどおりじゃねえか」

「だから、お前はなんで俺が言おうとすることを、先に言うんだよ！」

「知るか！」

「あゝもう！二人ともさつさと行くわよ！」

「そうだよ二人とも、早く行こうよ」

「いや、これはそんなに軽い問題じゃなくてだな……」

「いつもに増して杉崎君のウザさが増していると」

「そういうことじゃねえよ」

「杉崎君の言う通りだよ水無瀬さん！杉崎君はカッコイイよ！」

「やめろ！やめてくれ！それを言われるなら、水無瀬に罵られたほうがましだ……！」

「ええっ……杉崎君ってMだったの！？」

「そういうことを言ってるんじゃないよ！」

「いつもの1000倍増しで気持ち悪いですね」

「ああ！もういやだ……！」

もういい。さつさと真儀瑠先生を打って授業を終わらせよう。

「おっしや！真儀瑠先生を早く倒そうぜ！！」

またセリフを取られた。仕方ないから殴っておいた。

まあ、これ以上ここにいても、きりがなから、俺らは体育館を後にした。

### 3年D組の戦いゝ其の三ゝ

「どこを探せばいいんだ…」

俺は今、一人で校内をうろついている。なんで一人なのか、というのは、ついさつき守を殴ったあと、守が『杉崎は俺を殴った罰で一人で真儀瑠先生を探しに行け!』とか言われたからだ。

多数決を取ったが、惨敗だった。水無瀬は守側につくのには異論を唱えないが、なぜ中目黒まで守側についたんだ!? あいつは杉崎教の唯一の男の信者じゃなかったのか!?

……とまあ、こんな経緯で俺は今、一人で校内をうろついている。

ちなみに、他のメンバーは体育館で待機中。体育館はセーフゾーンだからな。俺が真儀瑠先生を見つけたら、巡の携帯にメールを送るということになっている。

『P r r r r r r r r r r』

「ん? 誰からだ?」

ディスプレイを見ると、守からだった。

「何だ守、そんなに殺されたいか?」

『なんで電話をかけたぐらいで殺されなきゃならないんだよ!』

「決まってるだろ。誰か一人ぐらい女子をよこせ」

『それだったら善樹を生かせるぞ』

「ああ、中目黒だったら大歓迎だ…」

『ええ！杉崎君、ぼくは大歓迎されるの！？』

「ぢゃくて、追いつく」

『杉崎君！今絶対「じゃ」の発音がおかしかったよねえ！？』

「そんなことはないぞ」

『うう、ひどいよ、杉崎君』

危なかった…あと少しで社会的に死ぬところだった。

『じゃあ、誰がいいんだよ』

「おい守、さつき中目黒と電話変わったのは、お前から電話を渡したのか、それとも中目黒が電話を奪ったのか、どっちだ」

『ヨシキガ、カッテニウバイマシタ』

「そうか、じゃあお前を社会的に殺してやろう」

『すいませんでした！』

「何かいい残すことはないか」

『本っ当にすまなかった！ほんの出来心だったんだ！』

「出来心でやっていいことと、悪いことがあるよなあ？今のはどっちだ？」

『…後者です』

「じゃあ、その後お前がとる行動は？」

『杉崎教の開祖である杉崎鍵様のもとに、女子たちを送ることです』  
「ざいます」

「それじゃあ待ってるぞ」

『杉崎様はどちらのほうがお好みでしょうか？』

「じゃあ、巡で」

『分かりました。今はどちらにおられるのですか？』

「購買の前だ」

『分かりました、ただちにお送りいたします』

「ああ」

そこで電話が切れた。最後のほうは、変な集団のリーダーと幹部、みたいな話し方になったが、気にしないでもいい。

「やてと…」

ほかのチームに見つからないように隠れておくか。そう思っていた矢先…

「おい！杉崎がいたぞ！」

「打ち殺せ！」

見つかってしまった。しかも一番出会いたくない二人に…

「くそっ！こっちは一人だって言うのに」

「崎田、お前は右から狙え！」

「分かった！由本、左は任せた！」

右から俺を狙ってくるのが、「射撃はプロ並み、他は並み」のキャッチフレーズでおなじみの崎田恭利。さきだ やすとし左から狙ってくるのは、「いちゃつく輩はいなくなれ」の由本海翔だ。よしもと かいと

由本は普段から隙あらば俺を攻撃してくる。しかも、今回は合法的に俺を痛めつけることができるかとあって、いつもと気合の入りが違う。対照的な性格の崎田は、いつもは優しいが、銃を持つと性格が変わる。二重人格ってやつだ。

おっと、説明が長くなったな。それじゃあ引き続き楽しんでくれ。



俺は薄れゆく意識の中でこう思った。大きかった、と

~~~~~

「おい、杉崎！大丈夫か」

「ん……ここは？」

確か俺は由本にやられたはず…

「なに寝ぼけてんだ。早く起きろ」

「…守」

なんで守がここに？

「杉崎、お前何も覚えてないのか？」

「…由本にわき腹をけられたところまでは覚えているけど、なんで蹴られたのかはさっぱりだ」

「そうか……」

「なあ、何があっただ」

「しょうがない、俺が全部話そう。
お前と電話をし終わった後、俺は水無瀬に『杉崎が購買の前で待ってるから、行ってきたくれ』って言ったんだよ」

「おいちよつと待て！俺は巡を呼んでくれって言ったんだ、なんでそこで水瀬を呼んだ！？」

「まあ人の話は最後まで聞け。小学校で習わなかったか？」

くそっ！人ごとだと思いやがって

「水無瀬は『杉崎君に呼ばれていくな、学校の屋上から飛ぶほうがましです』って言ったんだ」

「どんだけ嫌われてんだよっ！」

「だから、人の話は最後まで聞けって中学校で習わなかったか？」

「なんか、さつきより教育課程が一つ上がったような気がするんだが……」

「だが俺は必死で説得した。水無瀬に土下座してでも、杉崎のところに行ってほしかった。結果、水無瀬はしぶしぶ承諾した」

「どうやって納得させたんだ……」

「それで、3分ぐらいだったか。水無瀬が顔を真っ赤にして帰ってきたんだ」

「その間に俺が由本と崎田に追われていたと」

「ああ。それでな、あの水無瀬が顔を真っ赤にして帰ってきたんだ。何があったか知りたいと思うだろ？」

「ああ、そうだな」

「男子が訊くと答えてくれない可能性があるから、姉貴が訊いたんだよ。そしたら……」

「そしたら？」

「『……杉崎君に、胸をもまれました』って答えてさ。俺らも正直水無瀬が何を言ってるのか、全然わからなかったんだが、姉貴に杉崎のところに行けって言われたから、俺が来たんだ。まあ、俺が来るときに崎田と由本にはち合わせてな、あいつらは水がなかったから、俺でもすぐに倒せた。で、今に至るというわけだ」

ハ？オレガ、ミナセノムネヲ、モンダ？
ドウイウコト？

「おーい、杉崎、大丈夫か？」

「ハハハ、イッテルイミガワカラナイナア」

「ダメだ。完全に壊れた。…おーい杉崎、戻ってこい」

「ハッ！」

「いったい俺は何を！」

「ということだ。後で水無瀬に土下座でもしとけよ」

「そう言えば、守」

「なんだ？」

「俺は巡を連れてきてほしいと頼んだんだが、なんで水無瀬を呼んだんだ？」

「そりゃもちろん、お前が不幸になればいいと思っているからだ」

「お前のせいじゃねえか！！！」

「まあ、そう怒るな、杉崎。俺はただ単にお前の幸せが嫌いなだけだ」

「余計に悪いわ！！」

「しかし、俺もそんなことになるとは想定外だった。杉崎だけを、軽く不幸にするつもりだったんだがな」

「お前も水無瀬に謝れよ！！」

「大丈夫だ、お前が本当は姉貴を呼んでたということを誰に言おうが、現時点でお前を信じてくれるのは姉貴と中目黒ぐらいだ」

「……」

「まあ、水無瀬にも悪いことをした。お互い好きな人同士だったら、あそこまでの精神的ダメージはなかっただろうに」

「おい」

「ん？なんだ？」

「水無瀬の好きな人知ってるのか」

「ギクッ！」

「かかった！」

「な、何のことかさっぱりワカンネえよ」

「やっぱり知ってるんだな」

「そんなことないよお、杉崎っち」

「おい、去年合コンやった時の口調になってるぞ」

「にーさま、エリスなにもわかんない」

「なんでエリスちゃん口調なんだよ！？しかもお前がそれやると気持悪いだけだよ！」

「それじゃあ、とりあえず体育館に戻りますか」

「俺の話を聞けえ！！！」

必死の抵抗も空しく、俺は守に引きずられていった。

~~~~~

「ほら杉崎、謝るんだ」

俺は守に引きずられて、とうとう体育館まで戻ってきてしまった。

「すみませんでした!!」

とりあえず素直に謝っておこう。守の言うとおり、俺を信じてくれ  
そうなやつは巡だけだからな。

ちなみに水無瀬はいつもの鉄面皮に戻ってしまっている。あいつの  
恥ずかしがってるところ、見てみたかったんだけどなあ……

「とりあえず校舎の屋上に上って、跳んでください」

うん、土下座したくらいで許してもらえるとは思ってなかったけど  
ね!

「待ってくれ、水無瀬!」

「なんですか、地球のごみの代表が私に何の用があるんですか?」

「別にあれは俺が意図してやったことじゃない。たまたま、崎田と  
由本から逃げてる途中に、お前とぶつかっただけじゃないか」

「『たまたま』の一言ですべてが許されるんだったら、窃盗犯だろ  
うが殺人犯だろうが『たまたま』の一言ですべてが許されます」

そうですねーww

「というわけで跳んできてください」

「いや、だから……」

「なんですか？あなたが私の胸を触ったということだけが事実です。あなたの言い訳は聞きたくありません」

「はい、すみませんでした」

「杉崎、死ぬ前に言い残しておくことないか？」

言い残しておくことか……

「水無瀬」

「なんですか」

「やわらけゲブオ……！」

「やっぱり杉崎君は私の手で葬り去ることにしましょう」

「まっゲブオ……！……まっゲブオ……！！！！！！！！」

これは本当にヤバイ……もう駄目だ……意識が

「ストップストップ！流南、さすがにやりすぎでしょ！これじゃあ鍵が本当に死んじゃうじゃない！」

「……まあ、私も殺人犯にはなりたくないの、今日のところはこれぐらいで許してあげましょう」

「た……助かった……」

「よかったな杉崎。姉貴が止めてなかったら、お前は今頃死んでた

ぞ」

「守……」

この場で何もしていない親友に向かって、俺は大声で伝えてやった。

「お前のせいでこうなったんだろ！！！！！！！！！！」

「ゲフツ！！」

ついでにパンチも食らわせてやった。悪を抹殺すると、なんだかすがすがしい気分になる。

「さあ、それじゃあ残り時間も少ないことだし、みんなで真儀瑠先生を見つけに行きましょう！」

巡……お前はなんでそんなに元気なんだ……

ノリノリの巡と、明らかに俺といるのが嫌そうにする水無瀬と、俺がパンチをくらわしたので頬をさすっている守と、電話の後、ずっと体育倉庫に身をひそめていた中目黒と、体操服がかなりボロボロになった俺の5人は、真儀瑠先生を探し出して水鉄砲で撃つために、体育館を後にした。

### 3年D組の戦いゝ其の三了（後書き）

前の更新から時間が空いてしまいました。

次からは更新スピードを速く、且つ、みなさんに楽しんでいただけるような作品を書いていきたいです。

今回の小説は、あまり生徒会シリーズらしからぬノリですが、楽しんでいただけると幸いです。

### 3年D組の戦いゝ其の四ゝ

「おい、待ってくれ」

俺は今、守と中目黒を引きずりながら校舎をうろついている。守は気絶しているし、中目黒に至ってはなぜだか知らんが、世界を拒絶しているかのような状態だ。

……中目黒……一体何があつたつて言つんだ……

「ちよつとお、鍵。守と下僕なんて正直居ても無駄でしょ。だからとつとおいで行きましょうよ」

「いや、それはどうかと思つぞ、巡」

「なんで？」

「いや、別に中目黒は置いていってもいいが、守は超能力が使えるだろ。だから置いていく必要はないんじゃないか」

「それもそうね……じゃあ、下僕は可哀想だけどここにおいていきましょう」

「そつだな……」

ドサツ………中目黒、何があつたか知らんがお前の犠牲は無駄にはしない……

「つていうか、さっきから一年生の教室の前や二年生の教室の前を

通っていることに罪悪感を感じてるのは俺だけか？」

「何言ってるのよ、鍵。授業なんだから仕方ないじゃない」

「いや、それもそうなんだけどな……水無瀬、お前h……」

「さっき、あんなことをしておいて、全然反省してないんですか」

「すみませんでした！！！」

これはもう土下座せざるを得ないな。俺だって水無瀬の頬が赤く染まる様子を見たいが、命を捨てても見たいとは思わないな。

「それじゃあ、杉崎君。真儀瑠先生を探してきてください。おそらく、他の班の人は崎田君たちにやられてますから」

そうか、確かにさっき体育館に行ったとき、けっこう人数いたからなあ……。バレーやったりバスケやったりしてたやつもいたけど……

「じゃあ、ここで二人とも待っていてくれ」

そう言っつて、俺が守を下ろそうとすると……

「ねえ、鍵。守は超能力使えるんだから、連れて行ったほうがよくない？」

「そうですね。じゃあ、守君と行ってください」

「いや、ちょっと待てよ！」



俺は、泣きながら守に事の顛末を話した。

「杉崎……」

「お願いだよお！助けてくれよお！！」

「……分かった。で、具体的には何をすればいいんだ？」

涙ながらに訴えたら、守が折れてくれた。やっぱり長い付だと、どうすれば折れるのかを知れるから楽だな

……まあ今のは本気で泣いてただけだね。

「お前のテレパシーで俺の知り合いに声をかけてくれ。真儀瑠先生を見たやつがいると思うから」

「ああ、分かった」

~~~~~

「杉崎、真儀瑠先生の場所がわかったぞ！」

「ほんとか！？」

「ああ。とりあえず姉貴たちに報告だ！」

~~~~~

「それで、真儀瑠先生はどこにいるんだ？」

俺が守に訊ねる。ちなみに残り時間はあと15分。このままで大丈夫か？

「えーつとな、真儀瑠先生は、2年C組で授業をしてるらしい」

『なんでだよ！！！』

俺たち全員が突っ込んだ。それでも、守は話を続ける。

「生徒会の副会長の、あのおとなしそうな子とテレパシー通信をしてたら、『真儀瑠先生ですか？先生なら今、私たちのクラスで授業してますけど……』ってな」

「2つのクラスの授業掛け持ちって、教師としてダメじゃない！」

「いや、もうそうなってるんだから仕方ないだろ」

「そう言えば、どこ探してもいないなって思ってたんだよ」

「そりゃ、誰も真儀瑠先生が他のクラスで授業やってるとは思わないからなあ」

「あの人末期症状じゃないんですか、教師として」

「いやいや、出会った時からすでに末期だから」

「守……」

「どうした？杉崎」

「なんでそのことをさっき教えなかった？」

「いや、だってさ……」

そう言って、ウザいほどのスマイルを俺らに向け、守はこう言った

……

「そっちのほうか、かつこいいだろ」

『死ねえええ！……！』

「ゲボツ！」

三人で守が気絶しないように殴っておいた

「う……なんで姉貴や水無瀬まで……」

「だってあんたが説明するより、鍵のほうか説明早いじゃない。時間がないんだから早くしたいじゃない」

「私はただ単に守君を殴りたかっただけです」

水無瀬さん、あなた今すごくひどいこと言いましたよー

「……とりあえず、今は真儀瑠先生を倒すことだけを考えよう」

「もう、普通に奇襲でいいんじゃない」

「ええ、別にそんなにむきになることじゃありませんしね」

思ってみればそうだな……よし！

「奇襲で行こう！」

『賛成』

全員の賛成を得て何よりだ。守は否定すると思ったんだがな……

「それじゃあ、行くか」

~~~~~

「こちらキー１、スペース１応答せよ」

「こちらスペース１、無線ＯＫです」

「ＯＫ、スペース２応答せよ」

「こちらスペース２、同じく無線ＯＫです」

「ＯＫ、クイーン１応答せよ」

「こちらクイーン１、同じく無線ＯＫです」

「よし、それでは全員配置に着いたな」

『イエッサー』

……俺らは今、全員で2年C組の周りを取り囲んでいる。

水無瀬と巡は廊下側にいて水無瀬が後ろ側、巡が前側といった風である。

俺と守は窓側にいる。別に壁に張り付いているわけではなく、雨よけのために作られたコンクリートの出っ張り（詳しい名前は知らない）のところに立っている。俺が後ろ側、守が前側にいる。

ちなみに、窓は守のテレパシーを使って窓側の生徒に開けてもらっている。つまり、これから俺たちが奇襲をかけることを知っているのは、窓側の生徒だけだ。凜ちゃんや楓はもちろん、他の生徒たちは、今から水鉄砲をもった先輩たちが授業に乱入してくることは知る由もないだろう。

あと30秒、つまりこの授業の残り時間があと5分になったときに、俺らは奇襲を開始する。

……あと15秒

……5、4、3、2、1、0

「動くなっ！！！」

俺は十分にドスを利かせた声で、2年C組に侵入した。他のメンバーも侵入したらしい。

『きゃー！！！』

『助けて！！』

「なぜここがばれた！」

真儀瑠先生は二丁の水鉄砲を持って、教卓の上に立った。なあに、あっちが二丁だろうとこっちは4人いるんだ。絶対に勝てる

「グファ！」

「まもるーっ！！」

……なのに

「キヤアー！」

「めぐるーっ！！」

……なのに

「アアッ！」

「みなせーっ！！」

……なのに

「なぜ勝てないっ！！」

「杉崎、私は神だ、私にかなう奴など居るはずがない。さあ杉崎、安らかに眠れ」

誰か、この人を倒してくれ……。

人間という枠を超えたこの人を……倒してくれ……

俺はもう倒せない……だけど、せめてこの人が倒れるところだけは見せてほしい。

誰でもいい……誰でもいいから、早くあの人を……倒してくれ……。

「杉崎くん……！」

……誰かが俺を呼ぶ声が聞こえる。

「僕、杉崎君のためなら何でもするよ……！」

中目黒、おまえ、いつの間に

「むっ！」

真儀瑠先生は、突然現れた中目黒に反応できるわけもなく

『びしゃ』

「しまった」

「わーい！ やったよ杉崎君。僕、杉崎君の願い事かなえたよ！」

「くっ、私としたことが、油断した……だが中目黒、よくやったな」

「はいっ！」

『キーンコーンカーンコーン』

授業の終わりを告げるチャイムが鳴る。

「それじゃあ、今日の授業はここまでだ。それじゃあ私は体育館に行ってくるからな」

真儀瑠先生とともに、体育館に行こうとすると……

「真儀瑠先生！」

誰かが引きとめた。

「なんだ、楓」

「あとで、6人とも戻ってきてくださいね」

そう言った楓の背後には、阿修羅像が佇んでいるような気がしてならなかった。

~~~~~

「真儀瑠先生、いくら何でもやりすぎです…」

「すみません」

「それから、会長含めみなさんも、やりすぎです」

『すみません』

「あんまりふざけてると、あとでひどいことをしますよ」

『やめてください、お願いします』

「桔梗を呼ぶことも考えると……」

『それだけはやめてください』

俺と巡、真儀瑠先生は全力でお願いする。

「今日はここまでにします。今度こんなことをしたら……分かるですよねえ」

『はい、もうしません』

「それじゃあ、あと1時間、そこで正座しといてくださいね」

『はい?』

全員が口をそろえて訊いた

「ええと……楓、次の授業は」

「反省が足りないようですね」

『すみませんでした。ありがたく正座させていただきます』

「楓……次三年で授業があるんだが……」

「真儀瑠先生、桔梗を呼んでもいいんですか?」

「すみません」

「それじゃあ、あと一時間正座しておいてくださいね」

楓はそう言つと、自分の席に戻つて次の授業の用意をし始めてしまった。

凜ちゃんも、今は俺たちに同情の視線しかくれない。  
そして無情にも……

『キーンコーンカーンコーン』

次の授業の始まりを告げるチャイムが鳴った。

俺達6人が次の授業で教室の前方で正座をさせられたのは、言うまでもない……

### 3年D組の戦いゝ其の四ゝ（後書き）

次からはまた生徒会の話に戻りたいと思います

## h o t な生徒会（前書き）

初めて5000文字以上書きました。

## hotな生徒会

「あづい……………」

「そんなこと言つとよけいにあつくなるわよ」

「でも、ほんとうにあついですよね……………」

「そうですよね……………」

「ふにゃ〜」

暑い。読者のみんなにはいきなりすぎて分からないかもしれないが、とにかく暑い。6月とは思えない気温の高さだ。ちなみに温度計を見ると……………32……………溶けてしまう。北海道で生まれ育った俺らにとって、6月でこの気温はまさに地獄だ……………。

「とりあえず……………始めようか」

『ふあ〜い』

みんな暑さにやられてしまっている。特に凜ちゃんは今にも溶けそうな状態だ。……………いや、まあ俺も溶けそうなんだけどな。

「鍵〜、今日の議題は？」

「ん……………今日は……………特にない」

「じゃあ、駄弁りましょう」

とりあえず駄弁ろっ、と楓が提案する

「杉崎せんぱい、この前みたいに水鉄砲で涼しくしてくださいよ」

「いやゝだって楓に怒られるしなあ……」

「あの頃は楽しかったわねえ」

俺と巡は一週間ほど前の出来事を思い出していた。……まあそのことは、この前書いたのを読んでもくれればわかると思うので、ここでは省略する。それにしても……

「水無瀬の奴隷にならなくてよかったなあ」

あの後、俺は最終的に水無瀬に許しをもらった。というのも、守が悪かった、ということの説明したら怒りの矛先が守に向いてくれたのだ。今頃、守は水無瀬にこき使われてるのかもしれない。重い荷物を運ばされたり、肩もみを任されたり……。ハッ！肩を揉む……。だと……。

「あのゝ、杉崎先輩。どうしたんですか？」

桔梗ちゃんが訊ねてきたが、今はそれどころじゃない。……早く……早く

「ちょっとばかり水無瀬の胸を揉んでくる！」

「ひゃうっ！ー！」

「鍵！ストップ！楓が燃え尽きるわよ！」

「あれ？俺は今何を……って楓、どうしたの？」

俺がそう言って楓の肩に手を置くと……

「きゃああああ……！！！！！」

「ゲヴオフツ！！！」

『ど……おおおん』

「な……んで……」

「凜ちゃん！早く処置をしないと」

「桔梗ちゃん、早く用意を！」

「うん！」

「呼吸確認」

「していません！」

「脈拍確認」

「弱すぎて測れません！」

「心臓マッサージ10回。AED150Vチャージ」

「はい！」

「1、2、3、4、5、6、7、8、9、10」

「AEDチャージ完了！」

「はなれて！」

『バチンッ！』

「……呼吸戻りました」

「ちょっと、凜。そんな大変なことだったの！？」

「はい。あの威力で鳩尾を殴られたら普通は内臓が破裂しててもおかしくないくらいでしたよ」

「ん……俺は……一体……」

「大丈夫ですよ、杉崎先輩。凜ちゃんが直してくれました」

直すって……そんなにひどかったのか？

「楓ちゃん、あれだけ鳩尾だけはやるなって言ったでしょ！」

「うう……。だって……」

「だってじゃありません！もう少しで危なかったんですからね！」

「……ごめんなさい」

「もういいよ。俺もいきなりで悪かったしね」

ふ。なんかさっきより暑くなってるのは俺だけだろうか……

「それよりも、さっきより部屋が暑くなってない？」

「……この部屋の気温、今、35 だ……」

ああ、ダメだ。これはなんとかせねば……

「じゃあ、どうすれば涼しくなるか考えよう」

『おー！』

今ので気温が上がった気がするの俺だけだろうか……

「はいはい」

「はい巡」

「私はこの部屋のクーラーを業者さんに頼んで直してもらえばいいと思うわ」

「ダメだ。それじゃあ時間がかかりすぎる」

そうそう、今の話で思い出したが、いま生徒会室のクーラーは壊れている。まあ正確に言つと、長い間使ってなかったせいで動かない。ここ数十年くらいは使ったことがないと思う。

「凜ちゃんは何がある？」

「えーつとですね……。とりあえず、物置で会議をやりたいです」

「確かに……」

確かにあそこは涼しいからな……。よし！

「じゃあ、とりあえず物置で考えよう！」

物置とは言われているが、実際そんなに物は置いていない。まあオルガンが置いてあったり、ぬいぐるみが置いてあるだけだ。高校生にとつて必要なものばかり。……だと思いたい。

まあ、そんなことは置いといて、とにかく物置に入ろう。日光のせいで溶けてしまう。そういつておれが戸をあけると……

「すうすう……」

真儀瑠先生がいた。いたというよりも寝てたと言ったほうがいいかもしれない。っていつかいつの間にこの人は生徒会室に入ってきたんだ？

「……杉崎先輩、やめといたほうがいいですよ。真儀瑠先生、寝起き悪いですから」

「……うん、そうだね」

これはしょうがない。うん……しょうがないんだ……

「それじゃあどうする。このままだと、溶けちゃうし」

「あーじゃあSMでも……」

『却下!』

「賛成!」

俺ら三人は全力で却下させてもらった。

「凜ちゃん、時と場合によってやっていいことと悪いことがあるんだよ。そして今はSMはダメだよ。分かった?」

「はい」

明らかにしょんぼりとしているが、仕方ない。止めなければ逆に大変なことになるところだった。

「あつい……もう駄目だ………おやすみ、パトラッシュ」

『おやすみ、パトラッシュ』

そう言っただけ俺たちは意識を失った。

~~~~~

〜1時間後〜

「……ついに……ついに、戻ってきましたわ、生徒会室。噂によると、現在、あの変態副会長杉崎鍵が会長をやってるそうですわね。……それにしても、やけに静かですわね。……とりあえずちらっと覗いてみたいと思いますわ」

『カラカラ』

「……眠ってますわね。……今のところはいったん引き上げですわ」

~~~~~

〵そのまた1時間後〵

「……あれ？……寝てた？」

「……ふあゝ。……おはようございまふ」

「おはよう、凜ちゃん」

「ん……あれ、ぼく寝てたんですか？」

「あれ？私も寝てた？」

「あれから2時間くらいか……だいぶ涼しくなったなあ」

温度計を見ると21 だった。だいぶ下がったな……

「あれ？桔梗ちゃんだけ起きてない」



ふみゆー

「あ！そこはだめええええええええええ！！！！！」

この状況を端的に説明しよう。

桔梗ちゃんが楓の胸に顔をうずめている。そして俺は鼻血を出して  
る。うん。これ以上端的な説明はできない。

「ちょっと、トイレに行ってくる……」

「…行つてらっしやい」

「ふみゆー…ふよふよ」

「ああ！だめええええええええええ！！」

「楓、ちよつと胸触らせなさい！」

「わ、わたしも！」

「いやあああああ！！だめええええええええええ！！」

「……お、大きい！くっ。負けたわ」

「うう、私もまだまだ楓ちゃんより小さい……」

「いやあああ  
あああ！やめてえええええ！」

「ぶにゆぶにゆ…うにゆー」

「桔梗、ストップ！」

「ただいま……ってまだやってたの！？」

「たすけてえええええ！かいちよおおおお！！！」

やばい！なんか怖い！なんかもうエロスとかいろいろ通り越して怖い。

だが、このままだと俺が大量出血してしまう恐れがあるので、とりあえず助けよう。

「桔梗ちゃん、早く起きないと楓が大変なことになっちゃうよ」

「ふにゅー……あれ？私いつたい？」

『……………』

ダメだ。ここで話すといろいろなものが崩壊していくような気がする。

『ガラガラガラ』

「おーっほっほっほ！久しぶりですわねえ」

『……………』

「な、なんですの！わたくしがまるで空気を読めないような視線を向けてきて」

「いやあだつて……ねえ」

『うんうん』

「あーもう！とりあえず取材しますわよ！しゅ！ざーい！」

「いや、まあ別にいいですけど、どうしたんですか、リリシアさん」

生徒会室に空気を読まずに入ってきたのは、元新聞部部長藤堂リリシアその人だ。美少女であるが、金髪でお嬢様でメイド口調でツンデレってというのは、はたから見てもイタイと思う。

「新聞社に入社するにあたって壁新聞を作れという試験が出されましたの」

「はあ。それでなんで生徒会室に？」

「そっちのほうで壁新聞を作り易いと思いましたし、あなたが会長をやっていると聞いて、スクープになると思ったからですわ」

「その言葉に俺はどう反応したらいいんですか」

「それにあなたにも会いたかったですし……」

「え？リリシアさん、今何ていいいました？」

「べ、別になんでもないですわ！」

「はあ……あれ？でもリリシアさん、アメリカの製薬会社の息子さ

んと結婚する予定ではなかったんですか？」

「……そう言えば、そう言ったうそをついたことが何回かありましてわねえ」

「嘘だったんですか!？」

「ええ、そうですわよ」

「ひどい!あの時、俺、恥ずかしさやらいろんなものを捨てて、ああ言っただのに!」

ちなみにこの話については原作小説を読んでほしい。今は、俺の口からは話したくないんだ。

「まあ、なんでもいいですわ。それより早速取材を……」

『ガラガラ』

リリシアさんの途中で唐突に物置の扉が開いた。

「ん? 藤堂、来てたのか」

「ああ、真儀瑠先生。実は……」

「おいちよつと待て」

リリシアさんが話そうとするのを、真儀瑠先生が遮った。

「お前、ちゃんと理事長の許可もらったか？」

「！」

そうか、確か碧陽学園に生徒と先生以外の人が入るときには、理事長の許可をもらわなきゃいけないんだっただな。…ということは、今のリリシアさんの表情から察するに、理事長の許可はもらっていない。つまり碧陽学園には入ってはいけないということか……

「藤堂……不法侵入は立派な犯罪だぞ」

「ふ、不法侵入ではありませんわ！ただ単にフラァッと立ち寄っただけですわ」

「藤堂、それは不法侵入だ。国語の先生をだますならもつとましな嘘をつけ」

嘘をついてることについては否定しないの！？

「警察に行くか、私の家に来るか……どっちだ、藤堂」

「なんで真儀瑠先生の家に行かなければなりませんの！？」

「藤堂……独身の一人暮らしほどさみしいものはないぞ」

「真儀瑠先生……」

「何このシリアスな展開！？っていうかみんなもつとしゃべろっよ！いつもの生徒会らしく！」

「ま、真儀瑠先生！その気持ち、私の心に響いたわ！」

「私もです！」

「僕もです！」

「え！？みんなどうしちゃったの！？」

「何言ってるのよ、鍵。私、ここまで心に響く言葉を聞いたの3週間ぶりだわ！」

「私もです！」

「僕もです！」

「うん。多分、心に全然響いてないからね、その言葉」

三週間ぶりって結構最近じゃないか。……それにしても桔梗ちゃんはさつきから静かだ……って、寝てるっ！なんでこんなに騒がしいのに寝れるの！？

「ありがとうお前たち」

『真儀瑠先生！』

「え？なに？俺が悪いの？」

「大丈夫ですわ。わたくしにもあの言葉の深い意味は分かりませんわ」

「おっと、本題を忘れていた。で、どっちにするんだ、藤堂」

「警察にも行きたくありませんし、かといって真儀瑠先生の家もいやですわね……」

「そうか……じゃあ、うちに来い」

「今の話聞いてましたわよねえ！」

「とりあえず、うちに来い。話はそれから聞いてやる」

「いやああああー!!」

抵抗空しくリリシアさんは真儀瑠先生に連れて行かれた。うん、前にも同じような光景を見たことがある。

「おーい、凜！今日、私の家に来てくれ！」

「はーい！」

おかげで、凜ちゃんまでもが巻き込まれてしまった。

「それじゃあ、私、真儀瑠先生の家に行ってくるので……」

「ああ、大丈夫だよ。雑務は全部おれがやっとくから」

「ありがとうございます！」

そう言い残すと、凜ちゃんはタッタッタと駆けて行った。

「それじゃあ私たちも帰りましょうか、楓」

「あ、でもぼく、桔梗が起きるまで会長の雑務を手伝います」

「そう……それじゃあね！」

「はい、さようなら」

「……でもいいの？雑務結構しんどいよ」

「はい！ぼく、体力だけは自信があるんです！」

「……じゃあ、やるつか」

「はい！」

去年までなら考えられなかったことだ。凜ちゃんいわく、女の子は自分の好きな人と一緒にいる時間が一番楽しいらしい。

っていうことは、俺は凜ちゃんや楓から好かれてるってことなんだろうか。……まあ今は訊かないでおこう。

~~~~~

結局、最終下校時間になっても桔梗ちゃんは起きずに、俺がおぶっていくことになった。

「すみません、会長」

「いやいや、別にいいよ。それに桔梗ちゃんの寝顔が見れただけでもよかったし」

起きてる時はドSだったりするけど、寝てる顔はとっても可愛い。

「でも、家反対側じゃないんですか」

「んー……まあ誰もいないから別にいいよ。それより楓のほうは親御さんとか心配してない？」

「大丈夫です。ちゃんと『ちょっと先輩と夜遅くまでやってるから、帰るの遅くなるよ』ってメールしてきましたから」

「うん、その内容で送ったら確実に誤解を招くからね」

「大丈夫です。うちの親は『そうか……』と哀愁を込めたようなメールを返してきましたから」

「余計ダメだよ！」

何この子！？自分の言ってる意味がわかってるの！？

「とりあえず、誤解を解くために家までしっかり送っていくよ」

そこから先、楓の家に着くまではいろんな話をした。小学校の時の桔梗ちゃんが可愛かったとか、中学校時代から真冬ちゃんと友達だったとか、そんな話をした。

その後、楓の家に着いたら、楓の親御さんとひと悶着あったが、ここで語るほどのことではないので割愛する。

「会長、ありがとうございました。ほら、桔梗も」

「しゅぎさきせんふあい。ありがとうございまふ」

「どういたしまして。それより二人とも、ちゃんと早く寝るんだよ。夜更かしは肌の大敵だからね」

「はい。それではおやすみなさい」

「おやすみ」

そう言って姉妹は家の中に入っていった。さてと……あれ？なんか忘れてるような気がする。…なんだっけなあ……まあいいや

「俺も帰るか……」

h o t な生徒会（後書き）

生徒会らしさ……出てるでしょうか？

取材されない生徒会（前書き）

タイトルが変かもしれませんが、気にせず読んで下さいw

取材されない生徒会

「と、いうわけで、早速取材を始めますわよ」

リリシアさんが真儀瑠先生に拉致されてから2日たった日の放課後のことだった。

「ところでリリシアさん、なんでここにいるんですか？」

「え？取材するために決まっていますわよ」

「いや、それは分かるんですが、俺が訊きたいのは、なんで我が家のように生徒会室でくつろいでるのかってことです」

「ああ、そのことなら心配いりませんわ。ちゃんと理事長の許可を取ってますし、真儀瑠先生の許可も取ってますわ」

「ダメだ！この人話を合わせる気がない！」

「というわけで、取材始めますわよ！」

「……はい……」

といっても、生徒会室には今、俺とリリシアさんしかいない。……

「では開始いたしますわ。えーっと、最初の質問は………どうしてあなたはそこまで変態なんですか」

「それでは、取材を終わります。きりーつ、れい、『ありがとう

「ございやしたーっ!」

「勝手に『授業終わりまーす』的なノリで締めないでくださいませ
!」

「いやいや、普通壁新聞作るのにそんな情報はいらないでしょう」

「それは……あれですわ! 碧陽学園の生徒が今一番聞きたいこと
ランキングで4位だったからですわ」

「表彰台にすら上がってないの!？」

「コホン……それではまじめな質問に移りたいと思いますわ」

「初めからそうしてください」

「あなたはなんで会長になられたんですの？」

「いやー……なんででしょうかねえ。俺も気が付いたら会長になっ
てたと言えないですね。結局、会長たちがなんで俺を生徒会長
にしたかったのかも分からないんですけどね……」

「それでは、取材終わりますわ」

「え!？それだけ!？」

「だって、あなたのことは去年のうちにいろいろ調べましたから、
別にそんなに聞かなくてもよろしいのですわ」

「もっとやりましょうよ!取材!」

「それにもう聞きたいことも残ってませんし……」

「じゃあ、みんなが来るまで俺がリリシアさんに取材しますね」

「それはダメで……」

「シャラップ!!」

「うっ!」

「リリシアさん、自分がいつも取材する側とは限らないんです。リリシアさんが取材された時のための訓練を今からやるんです」

「はい」

「素直でおとなしい女性は好きです」

「べ、別にあなたに好きになってほしいから素直に返事したんじゃない、ありませんわよ!」

「おっ!得意のツンデレ」

「ツンデレじゃありませんわ!」

「はいはい分かりました、そういうことにしておきましょう」

「ヤバイ、リリシアさんが形容しがたい形相でこちらを睨んでいる。…は、早く話を移さなければ」

「ところでリリシアさん。質問始めてもいいですか？」

「え、ええ」

よし、なんとか静まった。……あとは怒らせないように慎重に、慎重に……

「バストサイズを教えてください」

「えーっと、ななじゅう……って何言わせてるんですのーっ！！」

「すみません、スリーサイズを教えてください」

「何言わせようとしてるんですのっ！！」

あれ？おかしいな。怒るような質問だったか？

「別にいいじゃないですか、減るもんでもないんだし」

「そういうことじゃありませんの！将来ハーレム王になるとか言ってた人とは思えないデリカシーのなさですわ！」

「そんな……いったい俺はどこを間違えたんだ……」

「そんなことにも気付かないんですの！？」

「いやー、よくクラスメイトの女子から『杉崎君ってかつこいいけど、察し悪いところがあるよねー』っていわれるんですけどねー。自分でもさっぱり分からないんですよ」

「あなた、そんなに鈍感ならハーレムの王になんてなれませんかよ」

「そんなに!?!」

「ええ、とてもひどいですわよ」

「そんな……俺はたくさんの女の子たちを幸せにすることができないのか!?!」

「ええ、今のままでは無理ですわね」

「リリシアさん、いったい俺はどうしたらいいんですか!」

「どうしようもありませんわ、もういつそ開き直ったほうが楽しく思いますわ」

「そうですか……ありがとうございますリリシアさん。俺は……俺は……ハーレム王になるっ!!」

「そうそう、その意気ですわ」

「というわけでリリシアさん、スリーサイズを教えてください!」

「上からなな」……って何言わせてるんですのーっ!!」

「なるほど……去年取材を受けた時は会長がいたからそれと比較して、多少大きく見えてただけだと。……つまりひんにy……」

「それ以上言つとほんとうにコロシマスわよ」

ヤバい、これは下手をしたら俺が死んでしまう。話を逸らさないと……

「大丈夫ですよ、リリシアさん。俺は……リリシアさんのように魅力のある人が大好きですから」

とびきりの笑顔を向けてそう告げた。そうすると、リリシアさんは……

「っ!!」

顔を赤くしてこちらから顔をそむけてしまった。何なんだ、この人さっきから怒ったり顔を赤くしたり、いろいろと大変そうだ……

そう思っていると、不意に生徒会室の扉が開いた。

「あ、杉崎先輩、リリシアさん。こんにちは」

生徒会室に入ってきたのは生徒会の副会長である神谷凜ちゃんだった。

……そうだ！いいこと思いついた！

そう思った俺は生徒会室に入ってきたばかりの凜ちゃんとアイコンタクトを交わす。こういうときにアイコンタクトで会話できるスキルは、とても便利だ。

「やあ、凜ちゃん」

リリシアさんに不審に思われないように、いつものような流れる会話をする。

「こんにちは」

よし！リリシアさんには勘付かれてない。このまま、いつものような会話に持っていこう。

「ところでリリシアさん。この2日間、いったいどこで何をしていたんですか？」

「うー！そ、それは……」

「リリシアさんなら真儀瑠先生にずっと付き合わされていたんですよ」

「ちょっと、待ちなさい！」

「2日間も!？」

「はい」

「凜さん、ちょっと待ってくださいませ」

リリシアさんの制止も聞かず、凜ちゃんはこの2日間の出来事について語り始めた。

「最初は、軽く愚痴につきあわされるぐらいの感じだったんですが、真儀瑠先生にお酒が入り始めると、大変でした」

「ストップ！ストップしてくださいませええええ!!」

リリシアさんが何か叫んでいるが、俺達の耳には全く届いていない。
……うん、この話、面白そうだ。

「それですね、真儀瑠先生が『おい、藤堂。こっちへ来い』と言
ったんで、リリシアさんが先生に近付くと……」

「いやあああああ！……！」

す、すごい絶叫ぶりだ……いったい何が……

「真儀瑠先生がリリシアさんをぎゅーっと、抱き枕のように抱き始
めたんです」

「いやあああああああ！……！！……！！……！！」

なるほど、プライドの高いリリシアさんが、そんなことを人に知ら
れたらプライドが傷ついてしまうと……

「大丈夫です、リリシアさん。もうこれ以上は何も聞きません。そ
れと……その………すいません」

俺が（生）暖かい視線を送ると、リリシアさんは燃え尽きた灰のよ
うに真っ白になってしまった。

「あれ？どうしたんですか？リリシアさーん」

凜ちゃんはそんなリリシアさんの肩を持って、ぐわんぐわん揺さぶ
っている。……とりあえず、止めさせよう。

「凜ちゃん、それ以上やると、多分リリシアさんは、奇声を発して

どっかに飛んでいくよ。それでもいいの？」

「どこかに飛んでいくんですか!？」

「うん。……どこか遠くへ飛んでいくんだ」

「それはダメです!リリシアさんとせつかく仲良くなったと思ったのに、どこかに飛んでいくななんてダメです!」

奇声を発するところと飛んでいくというところを疑問に思わないのは凜ちゃんらしい。……さて、そろそろリリシアさんを起こすか……

「リリシアさん、早く起きないと、家に行ってエリスちゃんと一緒に風呂にはいちゃいますよ」

「……………」

「あれ?起きないな。絶対起きると思ったのに」

「早く起こしてください!杉崎先輩。リリシアさんがどこかに飛んでいてしまいます」

いや、別にリリシアさんが起きなかったら飛んでいくとは言っていないけどね。……とはいえ、俺もこのままでは困る。うーん……どうすべきか……

そうだ!

「いい方法を思いついた!」

「杉崎先輩！早くしてください！」

「どっだけ真剣なんだ、この後輩は……そう思いつつも、とりあえずリリシアさんを起こす方法を実践する。」

「……フーツ」

「ひゃわっ!!」

「おお！大成功！」

「大成功じゃありませんわ!!この変態！」

「いやいや、ただ単に耳元にフーツと息を吹きかけただけです」

「その起こし方がダメなんですわ！」

「いや、そう言われましても……」

「第一、ハーレム王を目指してる人が女の子の起こし方一つ知らないなんて、ハーレムの王失格ですわ！」

「俺がハーレム王になるのは否定しないんですね」

「っ!!べ、別にわたくしはあなたのハーレムに入りませんからいいのですわ!!」

「……ツンデレ？」

「ツンデレなんかじゃありませんわ!!」

リリシアさんはそこまで言つと椅子にドスンと座った。……この人はいったい何に対して怒ってるんだ？

「リリシアさん、大丈夫？」

と、そこまで黙って、ことの成り行きを見ていた凜ちゃんが、涙目になりながらリリシアさんに言つた。

「大丈夫ですわ」

リリシアさんはそう言つと凜ちゃんの頭をなで始めた。突然頭をなでられた凜ちゃんは、最初は驚いたものの、すぐにいつもの笑顔に戻つた。……さてと、そろそろ……

「リリシアさん、ちょっと言いづらいんですけど……」

「なんですの？」

うつ！ダメだ。こんなまぶしい笑顔に残酷な言葉を伝えることは俺にはできない……

「あ！リリシアさん。そう言えば今日はなんでいるんですか？」

俺が迷っていると、凜ちゃんはその残酷な一言を告げようとする。ダメだ！やめるんだ！

「それはもちろん、生徒会を取材するためですわ」

ああ！神よ！助けてくれ！

「え？でも今日はみんな来ないですよ」

「え？」

……………終わった……………短い人生だった……………

「今日は楓ちゃんと桔梗ちゃんは家の用事で来られないって言うてましたし、巡先輩もアイドルの仕事があるから来られないって……………そうですよね、杉崎先輩」

凜ちゃん……………それを覚えているんだったら、俺とアイコンタクトしたことも覚えてほしかったなあ……………

「……………すみませんでした！！」

とりあえず、謝ろう。…そして、逃げよう。

「待ちなさああああい！！」

「いやだ！待ったら殺される！」

とりあえず、逃げよう。……………そう思って走っていると、遠くのほうに真儀瑠先生の姿が見えた。よしあそこまで走れば俺の勝ちだ！

「真儀瑠先生！助けてください！！」

「おお、杉崎。どうした…って、おい、なんだこの状況は」

「説明してる暇はないんで、早くリリースさんを止めてください」

「分かった……おい藤堂！またうちに来るか？」

「真儀瑠先生！？……真儀瑠先生、その男をこちらに！」

「まあ、落ち着け。とりあえず、杉崎を渡すんだったら今夜から一週間、私のうちで凜に勉強を教えることが条件だ」

「くっ！」

よし！さすが真儀瑠先生、この手の道で右に出る者はいない！

「……しかたありませんわ」

「よし、それじゃあ……」

あれ？なんかリリシアさんと真儀瑠先生の口調に違和感を感じたのは俺だけだろうか？

『交渉成立っ！』

そう言うとき真儀瑠先生は、俺の首根っこをつかんでリリシアさんのもとに連れて行った。

「やめてください！真儀瑠先生！」

「すまんな杉崎。私も自分のクラスの生徒が傷つくのを見たくないんだが……」

「嘘つけ！思いつきり笑ってるじゃないですか！」

「すまん、これが交渉というものだ」

「うそだ！ やめて！ やめてええええええええええ！！！」

俺の必死の叫び空しく、俺はとうとうリシアさんの近くに連れてこられた。

「これからどうなるか分かってますわよネエ？」

「すみません。なんでも言うことを聞くので許してください」

そう言って必死で土下座していると……

「杉崎先輩！リリシアさん！」

向こうのほうから凜ちゃんが駆け寄ってきた。

「リリシアさん、どうしたの？」

「今、この男をどうやって八つ裂きにするか考えていましたの」

「ええっ！？ダメですよ！杉崎先輩を八つ裂きにしちゃダメです！」

ごめん、凜ちゃん。今回ばかりは仕方がないんだ……

「ふふつ」

突然リリシアさんが笑った。
……怖い！！怖すぎる！！

「ど、どうしたんですか？リリシアさん」

凜ちゃんが恐る恐る聞くと、予想外の答えが返ってきた。

「今日はこのくらいにしておきますわ」

『え？』

「なんだか、ばかばかしくなったのですわ。してほしいことはまた今度にも考えておきますわ」

「いいんですか!？」

「ええ」

「リリシアさん、ありがとう!」

凜ちゃんはそう言ってリリシアさんに抱きついた。……ずいぶん仲良くなったな、この2人。

「さてと、今日はもうここでお開きにしますわ」

「それじゃあ、藤堂、凜、私の家に行っておけよ」

そう言って真儀瑠先生は職員室に入ってしまった。それじゃあ、俺も……

「じゃあね、凜ちゃん。テスト勉強頑張ってね」

「はい!」

取材される生徒会ゝ其の一ゝ

「というわけで、取材しますわよ!」

この言葉聞いたの、今月で何回目だろう……そう思いつつ俺はリリシアさんに声をかける。

「誰も来てないですけどね…」

「まったく、今年の生徒会はたるんですわ」

「いやいや、しょうがないですよ。今日はこの前の期末が一斉に返される日ですから」

碧陽学園のテスト返却システムは、他の高校と少し違うのかもしれない。

テストが終わるのが金曜日で、先生たちは土日間に採点をして、順位をはじき出し、成績を付けている。そして、月曜の朝に各学年一位から十位までの生徒の名前と点数が貼り出されて、最後のホームルームで返される。

俺らのクラスは、真儀瑠先生が早く終わりたいとのことなので適当に返すが、他のクラスはそれぞれにコメントを付けて返されるので、やたらと時間がかかる。

全く関係ない話だが、俺は今回、約一年ぶりに500点を取った。それとなぜか知らんが、守に殴られた。

『ガラガラ』

おっと、俺が無駄話をしている(?) あいだに随分と時間がたったのか、4人の美少女達が来たようだ。

「それじゃあ早速取材しますわよ!」

さてと、とりあえず皆に言っておこう。

「ちょっとみんな聞いてね。この人は、人の弱みを握るとそれに付け込んでくる悪魔のような人だから、質問に答えるときは時折嘘を混ぜるんだよ」

『はい』

うんうん、これでOK。……と思っていたのだが…

「ちょっと待ちなさい!」

「なんですかりりシアさん?俺は本当のことしか言ってますよ」

「わたくしがいつ人の弱みに付け込む悪魔になったんですの!」

「ははは、何を言ってるんですか、りりシアさん。いつも俺の弱みを握って脅迫してk……」

「さてと、チェインソーは確かこちら辺に……」

「すみません、止めてください」

「それじゃあ、クロコホルムは確かこの辺に……」

「俺を眠らせてどこへ連れて行く気ですか！しかも生徒会室にクロホルムなんてありませんよ！」

「それじゃあ、青酸k……」

「すみませんでした！……！！！」

これはもう土下座しないと許されるレベルじゃない。だって目が本気だもん。あんな眼をしたリリシアさん、今までに見たことがないよ。

『……………』

無言っ！誰かしやべろうよ！！俺も声出しづらいよ！！

「……………それでは取材を始めますわ」

……………助かった。

<以降、全員名前で誰のセリフかを表記します。あと、ごちゃごちやするのはいやなので地の文は表記しません。まあ、読者のみんななら俺が何を思っているのか分かってくれるだろう。by杉崎>

く巡への取材開始く

リリシア「それでは取材を開始いたしますわ」

巡「おねがいします」

リリシア「巡さんは現在、アイドル活動をしています、正直言って学校生活との両立は大丈夫なのでしょうか」

巡「はい。今は土日集中して仕事を入れてもらっているの、平日はしっかりと学校生活を楽しんでいます」

リリシア「ありがとうございます。…次の質問に移りたいと思いますわ。あちらにいる杉崎鍵とはどこまで進んでいらっしゃいますの」

巡「まだ手を握ったことぐらいしか／＼」

リリシア「結婚予定日はいつになさるのですか」

巡「け、結婚だなんて／＼」

リリシア「お子様は何人ぐらい……」
鍵「ストオオオオオッ！！！リリシアさん、すでに取材の範疇を越えてますよ！！あと、それ以上言うと巡が一切合切、質問に答えなくなりますよ。いいんですか」

リリシア「それでは、この質問は封印ということでは」

鍵「最初からそうしてください！」

リリシア「ゴホン……大丈夫ですよ？」

巡「は、はい。取り乱してすみませんでした」

リリシア「そ、それでは次の質問に移りたいと思いますわ。巡さんは御姉弟がいらっしゃるようですが、弟さんのことはいつもどう思っていますの」

巡「守のことですか？……まあ、使い勝手の言いパシリとは思ってまずけど……」

リリシア「扱いがひどすぎますわ！」

巡「でも、精度の低い超能力を頼るよりも高い運動能力を生かしたほうがいいと思いませんか？」

リリシア「そういうことを言ってるんじゃないやありませんの！」

巡「でも、守が去年……『また取材された……』と言って泣きながら帰ってきたことがあったんですけど、それって……」

リリシア「それでは次の質問に移りたいと思いますわ」

巡「切り替え早っ！」

リリシア「それでは、巡さんの私生活について質問いたしますわ」

巡「はあ、私生活ですか……」

リリシア「それでは、いつもは何時ごろに起きていますの？」

巡「さつきまでの質問と温度差激しいですね！」

リリシア「いえいえ、そんなことは……ないですよ」

巡「標準語！！この人、あまりのショックで自分を忘れたわ！！！」

鍵「巡、それ以上言ったら、リリシアさんは奇声を発してどこかに飛んでいくぞ」

巡「標準語！！この人、あまりのショックで自分を忘れたわ！！！」

鍵「繰り返した！？止めるんだ、巡！！」

巡「標準語！！この人、あまりのショックで自分を忘れたわ！！！」

鍵「やめろ！ほら、凜ちゃんも何か……って、寝てるっ！！この騒ぎの中で寝ちゃったよ！！！！しかも小鳥遊姉妹も寝ちゃってるよ！！！！！！」

リリシア「…大丈夫…です…わ」

鍵「リリシアさん！？」

リリシア「このくらい…平気です…わ」

鍵「絶対無理してますよねえ！？」

リリシア「大丈夫ですわ。このくらい大丈夫ですわ」

鍵「………もうどうでもいいので、早く取材をやってください」

リリシア「そう言われるとなんか傷つきますわ」

鍵「え？何か言いましたか？」

リリシア「なんでもありませんわ！」

鍵「いや、でも聞こえないと議事録書くのに困るんですよ」

リリシア「そこはあとでわたくしが、凜さんに教えておきますので大丈夫なのですわ！」

鍵「そうですか、なら取材を早く始めちゃってください」

リリシア「あなたに言われなくてもそうするつもりでしたわ！」

巡「あ、あのお……」

リリシア「すいませんでしたわ」

巡「こちらこそ、すいませんでした」

鍵「二人とも仲良くするんだぞ」

リリシア＆巡『誰のせいでこんなことになったと思ってるんですの（思ってるのよ）！！』

鍵「ぐふっ」

リリシア「それでは取材を再開いたしますわ」

巡「はい、おねがいします」

鍵「二人とも………ちよっと…待って……」

リリシア＆巡『えいつ』

鍵「ゴフツ」

リリシア「杉崎鍵のどのようなところに惹かれたんですの」

巡「え、えつと、そ、それは／＼／」

リリシア「ささ、本人が寝てる間に、早く早く」

巡「え、えーつとですね………優しさ、ですかね」

リリシア「優しさ、ですか？」

巡「はい。鍵が持っている優しさに惹かれたんだと思います。私も最初は、ただの変人だと思っていたんですけど、一年の時の冬に私が仕事に疲れて、フラツといなくなったときに、鍵は三日三晩私を探し続けてくれたんです。それでも鍵はあたしが帰ってきたときに何も言わなかったんです。そのあとは友達がそのことを教えてくれて……それで私は鍵の持っている暖かい優しさに惹かれたんだと思います」

リリシア「……ありがとうございますわ」

巡「ハッ！す、すいません！」

リリシア「大丈夫ですわ」

巡「で、でもこれ入社試験の壁新聞に使われるんですよ。わ、私ったらそんなことも気付かずに、恥ずかしいことを／＼／＼／」

リリシア「大丈夫ですわ。この質問はわたくしが個人的に聞きたかっただけなので、壁新聞には書きませんわ」

巡「そうですか（ホッ）」

リリシア「それでは売れっ子アイドル、星野巡さんへのインタビューでした」

「巡への取材終了」

リリシア「それにしても、今年の生徒会はよく寝ますわね」

巡「一人を除いては、みんな寝てますね」

リリシア「ええ、そうですわね」

巡「皆いい笑顔ですね。一人を除いて」

リリシア「そうですわね。……時間もまだありますし、起きるまでしばらく待っておきますわ」

取材される生徒会ゝ其の二

リリシア「それにしてもなかなか起きませんわねえ」

巡「とりあえず鍵だけたたき起こしますね」

『ドガッ』

鍵「グフッ……あれ？俺はいったい何を」

巡「凜たちも寝てるから、眠くなって寝たんじゃない」

鍵「確かに……。そう言えばリリシアさん、取材終わったんですか？」

リリシア「この状況で終わってると思うのはあなたぐらいでは？」

鍵「ありがとうございます」

リリシア「全くほめてませんわよっ！！」

鍵「ところで、どうするんですか？」

リリシア「起きるまで待つしかありませんわねえ」

巡「もう起しちゃえば？」

鍵「だって全員いっぺんに起こしたら……待てよ、……そうか、一人ひとり起こしたら問題ないか……桔梗ちゃんとは別として。……よし！善は急げだ。おい、楓。ゲットアップ」

リリシア「なんでそこだけ英語なの？」

楓「んんっ」

鍵「（これはちよつとエ……）」

巡「変な目で見えるなあああ……！」

鍵「すいませんでした……！！！」

楓「ん……あれ？ぼく寝てた？」

巡「普通に寝てたわよ」

リリシア「そろそろ取材を始めても……」

楓「すいません」

リリシア「ありがとうございますわ。えーっと、まずお名前からよろしいでしょうか」

楓「はい。小鳥遊楓です」

リリシア「それでは質問に移りたいと思いますわ」

楓「よろしく願います」

リリシア「今年の生徒会についてはどう思われてますの」

鍵「いきなり核心をついた質問してきやがった！！！！」

楓「えーっと、ちよつとぼくの想像とは違うなあって思いました。

生徒会はずっと忙しいところだと思ってたんですけど」

鍵「そして楓もまじめに答えたっ！！！！」

楓「でも、今は放課後のこの時間が楽しみです。会長や巡先輩とは生徒会室以外ではあんまり会わないので、この時間に会えることを楽しみにしてるんです」

リリシア「ありがとうございますわ。それでは次の質問ですわ。えーっと、その大きな胸の秘訣を教えてくださいませ」

巡「私も聞きたい！」

楓「ええっ！！いやっ！こ、これは、好きでなったわけでは」

リリシア「とりあえず秘訣を」

楓「う、うわぁーん！かいちょー！」

鍵「よーしよーし。あの二人は俺が何とかするから、楓は落ち着くまで待っててね」

楓「ありがとうございます」

鍵「二人とも、そんなことを聞いて何になるっていうんだ」

巡「だって、鍵は大きいのがいいって言うし……」

鍵「いやいや！別に俺そんなことは言っていないよ！大きいのもいいけど、小さいのもいいんだよ！」

リリシア「だって、小さいと馬鹿にされますし……」

鍵「馬鹿になんかしませんよ。巡もリリシアさんもどっちも可愛いからOKなんです！」

巡「か、可愛いって／＼／」

リリシア「べ、別に、あなたにか、可愛いと思ってもらってもうれしくありませんわっ／＼／」

鍵「ほら、この二人も反省してるみたいだから」

楓「ありがとうございます」

鍵「ほら、二人とも謝って」

巡&リリシア「「ごめんなさい（ですわ）」」

楓「こちらこそ取り乱してすいませんでした」

鍵「それじゃあ、取材を再開しましょう！」

リリシア「それでは気を取りなおして、…妹さんとの御関係は」

楓「普通の姉妹ですが？」

リリシア「実は好きだったりとかは」

楓「はい、好きですよ。だって可愛いじゃないですか。だいたい、妹が嫌いな人っていませんよ」

リリシア「……確かにそうですね」

楓「それに、ぼくは桔梗が毎日を楽しく過ごせれば、それでいいと思ってますから」

リリシア「……ありがとうございますわ。次の質問は、『碧陽学園全生徒に聞いた今年の生徒会に関する質問』ランキングで1位になった質問ですわ。生徒からのアンケートを代読いたしますわ『生徒会副会長の小鳥遊さんは、なんで一人称がぼくなのですか？』とのこと」

鍵「それは俺も知りたい」

巡「私も」

楓「えーつとですね。確かぼくが小3のころだったと思うんですが、クラスメイトがマンガを読んでいて、楽しそうに話をしてたんですよ。そのクラスメイトに貸してって言ったら、快く貸してくれたんです。そのマンガの女子のキャラクターの一人称が『ぼく』だったんで、一回言ってみたら、意外にもしっくりきたんで、その時からぼくって言ってます。そして、今に至るというわけです」

リリシア「……そのマンガのタイトルは？」

楓「すいません。それがあんまり覚えてなくて……」

リリシア「『小学校時代に読んだマンガに影響された』つと。それ

では、この辺で取材を終わらせていただきますわ。ありがとうございましたわ。」

楓「はい！ありがとうございました」

鍵「……それにしても、この二人、なかなか起きませんね」

巡「そういえば、凜も桔梗もテストの結果がどうだったのか、気になるわね……」

楓「もういつそのこと、見ちゃったらどうですか？」

鍵&巡「それだ!!」

リリシア「いやいや!」『それだ!!』じゃ、ありませんわよ!!」

鍵「大丈夫ですよ。結果がよかつたらほめればいいし、悪かつたら見なかつたってことで」

楓「凜はリリシアさんが教えてましたし、桔梗も今回、頑張ってたんで、この前より悪化してることはないでしょう」

巡「それじゃあ、オープン!」

~~~~~

鍵「あれ？これって凜ちゃんのテストだね？楓のじゃないよね？」

楓「はい。真正正銘、凜のテストですよ」

巡「国語78、数学82、英語66、社会87、理科77……これ本当に凜のテストなの？」

楓「はい」

鍵「……リリシアさん、どんな教育をしたんですか？」

リリシア「どんな人でも、飴と鞭をうまく使えば、一週間でこのくらいの点数を取ることくらい簡単ですわ」

巡「日本中の教育機関の教育方針に取り入れたらいいんじゃないかしら」

楓「それにしても、一週間でこの出来とは……」

リリシア「まあ、本人がけっこう頑張ってたし、あとは、真儀瑠先生のスパルタ教育もこの結果につながってると思いますわ」

鍵&巡&楓「すげえ……」

取材される生徒会、其の二丁（後書き）

中途半端なところで終わってますが、続きます

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7405v/>

---

新しい生徒会

2011年12月5日18時54分発行